

昭和 56 年度

# 京都市埋蔵文化財調査概要

(試掘・立会調査編)

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

## 凡 例

- 1 本書は財団法人京都市埋蔵文化財研究所が昭和 56 年度に行った原因者負担による試掘・立会調査の概要報告である。
- 2 本年度の調査件数は試掘調査 10 件，立会調査 21 件，計 31 件で，試掘調査 1 件については，発掘調査に切り換えた。
- 3 表 4 試掘・立会調査一覧表は，本年度実施した原因者負担によるすべての試掘・立会調査を，平安宮・京跡と京域外の市内遺跡に分けて記載したものである。番号は調査位置を示す地図の番号と一致する。なお，遺跡番号は昭和 55 年 10 月発行の京都市遺跡地図の遺跡番号を標記した。
- 4 本書作成にあたっては，各担当調査員と協議を行い加納敬二が編集を行った。
- 5 本書中で使用した遺構，遺物の番号は調査ごとに付した。遺構表示記号は奈良国立文化財研究所の用例に従った。  
例：SB (建物)・SD (溝，流路)・SE (井戸)・SK (土壙)・SX (不明遺構)
- 6 標高は，京都市水準点を用いた。
- 7 本書に掲載した地図は，京都市発行の 2500 分の 1 都市計画基本図及び京都国立博物館発行の 1000 分の 1 都市計画図を調整し，使用したものである。

# 目 次

I	試掘・立会調査の概要	1
II	平安宮・京跡	2
1	左京二条三・四坊	2
2	左京三条一坊	6
3	左京五条二坊	8
4	左京九条三坊	9
5	右京北辺二・三・四坊, 一条二・三・四坊と北野麿寺, 北野遺跡	10
6	右京三条一坊	14
7	右京四条二坊	16
8	右京六条一坊	18
9	右京五条二坊・六条二坊	19
10	右京七条一坊	22
11	右京七条二坊 (1)	23
12	右京七条二坊 (2)	24
13	右京八条二・三坊	25
14	右京九条二坊	28
15	西寺跡	30
III	京域外の市内遺跡	33
1	大徳寺境内隣接地	33
2	相国寺境内	34
3	北白川麿寺	37
4	北野麿寺, 北野遺跡	38
5	中久世遺跡	42
6	国立京都病院構内遺跡	46

#### IV ま と め

## 図 版 目 次

図版 1	左京二条三・四坊 2 堆積状況	1 調査地遠景
図版 2	左京三条一坊 2 二条大路路面	1 調査地全景
図版 3	左京九条三坊	1 堆積状況 2 遺物出土状況
図版 4	右京北辺二・三・四坊, 一条二・三 ・四坊と北野廃寺, 北野遺跡	1 井戸 (S E 4) 2 道祖大路西側溝
図版 5	右京四条二坊	1 調査地全景 2 F区3流路
図版 6	右京六条一坊	1 C地点堆積状況 2 B地点井戸
図版 7	右京五条二坊・六条二坊	1 1区西堀川西肩部 2 16区西堀川東肩部
図版 8	右京七条一坊	1 調査風景 2 D地点井戸
図版 9	右京七条二坊 (1)	1 調査地全景 2 A区井戸 (S E01)
図版 10	右京七条二坊 (2)	1 C地点堆積状況 2 D地点堆積状況
図版 11	右京八条二・三坊	1 調査地全景 C区 2 A区2号井戸
図版 12	右京九条二坊	1 調査地全景 2 B区1号井戸
図版 13	西寺跡	1 調査地全景 2 2区溝状遺構

図版 14	大徳寺境内隣接地	1 調査区北壁土層堆積状況 2 遺物出土状況
図版 15	相国寺境内	1 光源院北部, 南北方向石列遺構 2 玉竜院前東西方向石組溝
図版 16	北白川廃寺	1 調査地全景 2 B地点堆積状況
図版 17	北野廃寺, 北野遺跡	1 石敷遺構 2 北野廃寺東限溝
図版 18	中久世遺跡	1 1号住居 2 石匙出土状況
図版 19	調査地点 平安宮・京図葉分割図	
図版 20	平安京一	
図版 21	平安京二	
図版 22	平安京三	
図版 23	平安京四	
図版 24	平安京五	
図版 25	平安京六	
図版 26	京都市北部	
図版 27	京都市西北部	
図版 28	京都市東部	
図版 29	京都市南部	
図版 30	京都市西南部一	
図版 31	京都市西南部二	

## 挿 図 目 次

図 1 調査位置図	2	図 28 調査風景	27
図 2 春日小路南側溝出土遺物	4	図 29 調査位置図	28
図 3 東西横断面図	5	図 30 井戸 2 断面図	28
図 4 調査位置図	6	図 31 B区井戸 2	29
図 5 1区南北縦断面図	7	図 32 調査位置図	30
図 6 調査位置図	8	図 33 縦・横断面図	31
図 7 調査区土層断面図	8	図 34 調査位置図	33
図 8 調査位置図	9	図 35 出土遺物実測図	33
図 9 調査区土層断面図	9	図 36 調査位置図	34
図 10 出土遺構分布図	13	図 37 南北縦断面図	35
図 11 調査位置図	14	図 38 調査位置図	37
図 12 2区南北縦断面図	15	図 39 調査区土層断面図	37
図 13 調査風景	15	図 40 出土遺構分布図	41
図 14 調査位置図	16	図 41 南北縦断面図	42
図 15 B区西堀川	17	図 42 出土遺構分布図	45
図 16 調査位置図	18	図 43 調査位置図	46
図 17 調査区土層断面図	18	図 44 遺構平面図	46
図 18 調査位置図	19	図 45 全景	47
図 19 10区東西横断面図	19		
図 20 12 B区西堀川跡	21		
図 21 調査位置図	22		
図 22 調査区土層断面図	22		
図 23 調査位置図	23		
図 24 調査位置図	24		
図 25 調査区土層断面図	24		
図 26 調査位置図	25		
図 27 東西横断面図	26		

## 表 目 次

表 1 出土遺構一覧表		11
表 2 出土遺構一覧表		40
表 3 出土遺構一覧表		44
表 4 試掘・立会調査一覧表		50

## I 試掘・立会調査の概要

京都市埋蔵文化財調査センターの委託を受けて昭和56年度に実施した試掘・立会調査の件

数は試掘調査10件、立会調査21件の計31件であった。遺跡別にみると試掘調査は平安宮1件、平安京1件、伏見城2件、中臣遺跡1件、史跡御土居隣接地1件、檜原廃寺隣接地1件、国立京都病院構内遺跡1件、大徳寺境内隣接地1件、田中構跡隣接地1件の計10件であった。立会調査は平安宮2件、平安京左京10件、右京2件、左・右京にわたるもの1件で、平安京外では長岡京跡、北野廃寺、中久世遺跡等でその他の遺跡を含め6件あった。なお、試掘調査10件のうち遺構、遺物等の遺存状態の良好な平安宮跡1件については発掘調査に切り換えた。

試掘調査は調査期間が3～6日間で、調査内容も部分的な調査であるため限定された条件での調査であるといえる。そのため調査前に行う資料収集（報告書、地図、調査歴等）が調査の進行・成果にかかわる比重は大きい。

今年度実施した立会調査は、広域と単線の調査の二つに大別することができる。広域調査は調査範囲が広域に及ぶもので、調査期間も長期にわたるものである。したがって調査にあたっては調査員が専従で現場事務所に常駐しながら調査を行う。この調査は京都市下水道局の依頼による下水道管敷設に伴うものがほとんどで、今年度は平安京1件、平安京外5件の計6件の広域調査を実施した。広域調査の場合、期間が長く調査区域も広範囲に及ぶため、調査計画・目標を設定して調査を実施することができるが、1日数件の工事掘削に立ち会わねばならぬため調査は制約されたものになる。そのため工事進捗率と考え合わせて工事着工以前に5・10・15m等の間隔で測量地点を設定し水準測量を行い、掘削時にその地点の断面計測等の記録作業を行う。

単線調査は、調査期間が短く調査区も単線の工事区での立会調査である。工事種別みるとガス、電気、電話線、上水道で今年度は13件の調査を実施した。単線の立会調査は担当調査員が現場事務所に常駐できないため、車に作業用具、記録用具などを積み調査にあたった。調査においては、広域と同様の方法をとった。

(加納敬二)

## Ⅱ 平安宮・京跡

### 1 左京二条三・四坊

表4-7 図版1-1・2

**経過** この調査は、中京区丸太町通を烏丸通東から河原町通西まで関西電力地中線埋設に伴う立会調査として実施した。調査地は、平安京左京の北東部、左京二条東辺から二条三坊十五町に至る地域にあたる。このため、東洞院大路、高倉小路、万里小路、富小路、東京極大路、春日小路的確認、平安京東辺・左京各町内の遺構把握及びその歴史の変遷を主な目的とした。調査期間は、昭和56年9月17日～昭和57年3月19日までである。以下調査の内容を記す。

**遺構** 調査地の現地地形は、裁判所付近が標高46.7m、烏丸通付近で44.7m、河原町付近が45.1mと、裁判所付近がほぼ中央で高くなっており東西両側に緩やかに傾斜している。調査区の基本土層は、現代整地層を除く近代以前の各時期の包含層についてみると、一町ごと又は一町内でも異なり複雑な様相を呈している。このうち麩屋町～裁判所付近、東洞院～烏丸間では比較的単純な層位を示す。これは、前者が春日小路及びその南側溝に相当していると考えられ、また後者は室町期の大規模な堀状遺構を縦断していたためにこのような層序が確認できたと考えられる。一方、寺町通付近から東には、近世以降の整地層が水平に堆積しているのに対し、中世以降の包含層は、砂と礫の互層となって東側へ大きく傾斜していることから、中世においては、賀茂川の旧流路あるいは氾濫による堆積層が、ここまで及んで広がった時期があることが判明した。そのため寺町通より東では中世以前の遺構は確認できなかった。調査地の平安時代整地土層下面の標高は、堺町～裁判所間が高く、現地形と同様、東西両側に傾斜する地

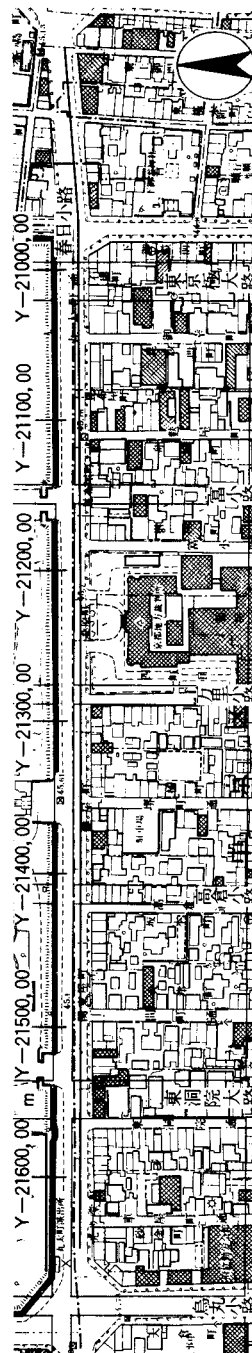


図1 調査位置図 (1:5000)



形であったことを示している。そして、この区間の平安時代整地土層下には茶褐色砂泥層（地山）が非常に厚く堆積するのに対してこの区間より西側では、砂礫と泥土が互層となって更に傾斜している。なお、富小路通交差点部で確認した砂礫層には古墳時代の土器が包含されており、間之町通付近でも砂礫層から時期不明の土器片が出土している。検出した遺構は、平安時代から近世までの各時期に及び、その性格も溝、路面、柱穴、土壇、土器溜、井戸状遺構、墓など多種にわたる。条坊に関連する側溝及び路面の整地層が確認できたものは高倉小路、万里小路、富小路、東京極大路、春日小路であった。主に11世紀代に廃棄された溝が一番多く確認でき、室町時代の溝を検出できた所もある。側溝の幅については、11世紀代のものは、幅1m～1.5m、深さ0.7m前後の逆台形を呈するのに対し、室町期のものは、幅がやや狭くなっており、時期ごとで異なっている。また、路面の整地層が一番明瞭に確認できたのは万里小路、高倉小路であった。これらのうち明確に9世紀代と考えられるものとしては、麩屋町西側の竪坑内発掘調査で検出した春日小路南側溝が挙げられる。ところが東京極大路外畔については、東側溝及び中川と考えられる溝状遺構をいくつか確認したが、検出した遺構が各々どれに該当するのかは明確ではなく、より一層の検討が必要である。一方、各町内においても、各時期の土壇、柱穴、包含層、土器溜などを確認したが、この内で特筆すべき事項としては、高倉通り東の竪坑部より東側で、11世紀代の直径6m以上、深さ0.8m以上の大規模な土壇が確認されて、その土壇から多量の土器が出土したことである。土器は、土師器が圧倒的多数を占め、完形のものも多く、土壇内にぎっしりつまっているような状態であった。性格は不明であるが、今調査地点内において、最も顕著に遺物が出土した遺構例である。また、寺町通り東側では、近世以降の墓壇の検出と墓石の出土が確認された。

**遺物** 出土遺物は、整理箱約120箱で、土器・互・鉄製品・古銭などがある。瓦類は、調査区全般で均一に確認できたのではなく、特定地区に集中して検出した。出土地点は裁判所前の落込状遺構からで、平安時代後期の互が多量に出土した。土器類は、今回の調査で出土した遺物の大半を占め、古墳時代から室町時代末期に至る各時期のものが出土し、器種は土師器が多数を占めるが、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、国産陶器、輸入陶磁器なども出土し多岐にわたる。これらのうち、条坊関係の側溝及び土壇、土器溜から11世紀代の土器が多量に出土し、この時期の比較的まとまった資料となる。これらの遺構から出土した土器中に、墨書土器も数点認められた。この他、御幸町通り交差点竪坑部の調査で検出した春日小路南側溝と考えられる溝から、9世紀中頃から10世紀前半にかけての良好な一

括土器が出土した。なお、今調査区内では、弥生時代の明瞭な遺構及び包含層を確認できなかったが高倉通り東壘坑内の平安時代土壌からサヌカイトのチップが出土した。

**まとめ** 今調査において平安京左京東京極大路外畔から二条三坊十五町に至る、大路と小路及び町ごとの状況を、11世紀代の大路・小路の側溝の検出により、かなり具体的に把握することができた。平安京造営時の条坊関係の遺構は、ごくわずかにすぎず、造営時の状況を知る手がかりはあまり得ることができなかったが、11世紀代における二条三坊及び四坊の各条坊間の状況、更に道路の実体を具体的に知ることができたのは今調査の大きな成果といえよう。また、この時期に、裁判所前での多量の瓦の出土は、文献にみられる大炊殿、周防宿所などに関連するものとも考えられる。一方、東京極大路外畔についても、中川と思われる遺構の確認、中世以降の賀茂川による堆積層の確認など、その実体についてもある程度知ることができた。今後の、遺構、遺物の詳細な検討と条坊遺構の数値処理によって、宅地変遷の実体を明らかにできるものと思われる。(堀内明博)

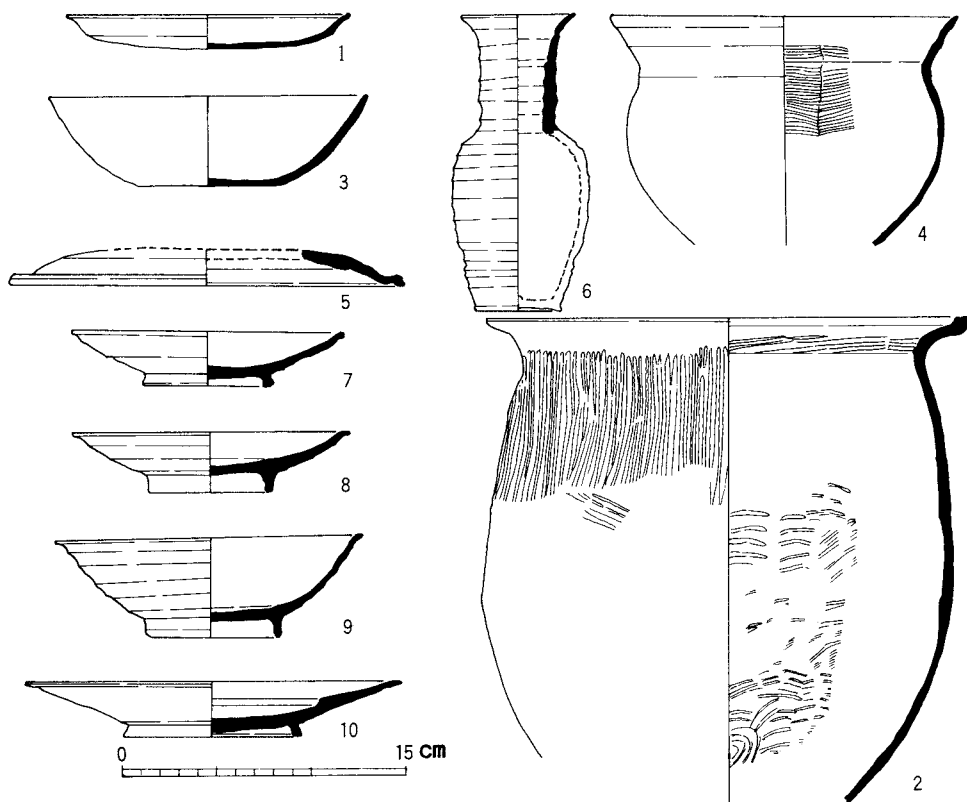


図2 春日小路南側出土遺物

溝上層 - 土師器 1・2, 黒色土器 3・4, 灰釉陶器 7~9

溝下層 - 須恵器 5・6, 緑釉陶器 10 (1:4)

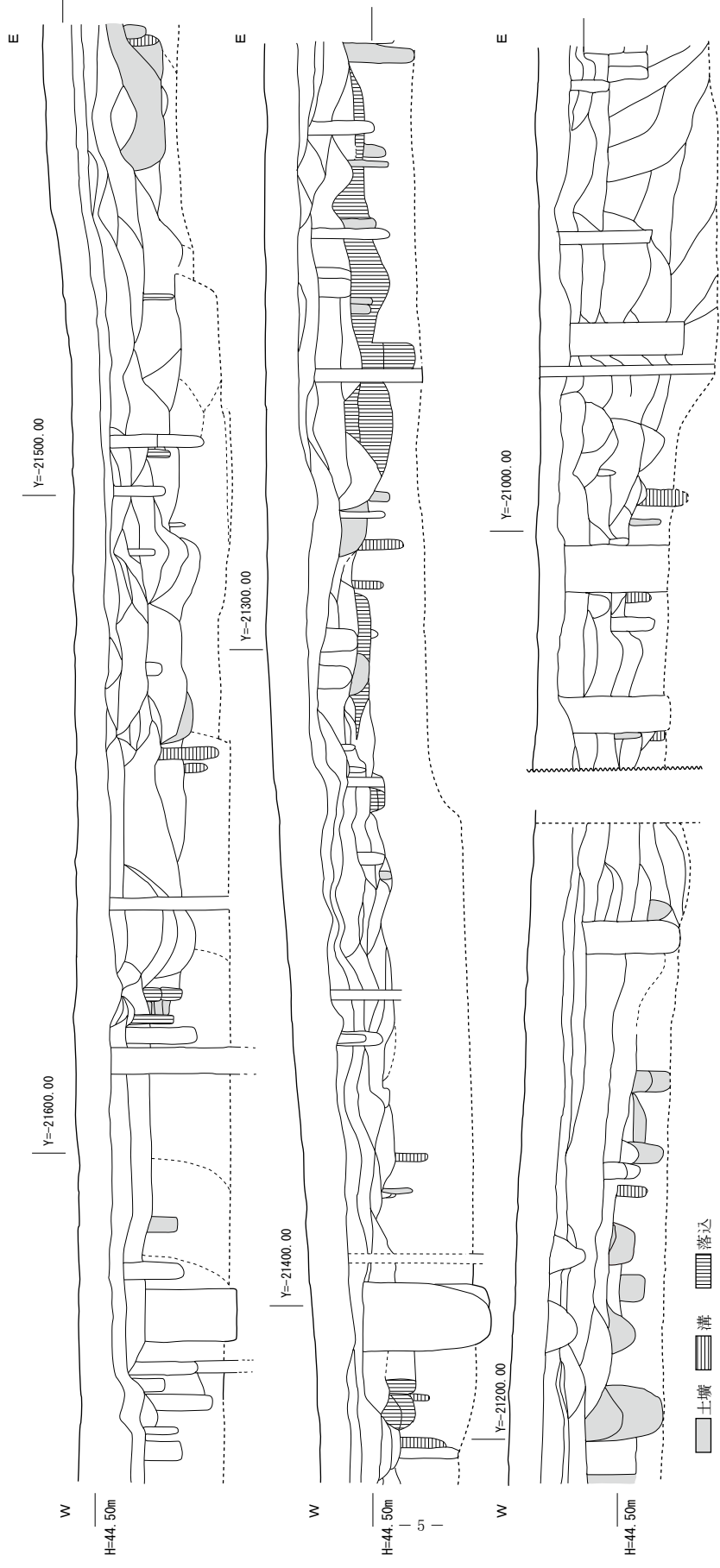


図3 東西横断面図 (縦1:100, 横1:1000)



が出土した。③基壇状遺構 96.3m で特異な土層を検出した。この土層はGL -1.0m ~ 1.3m にかけて存在する褐灰色砂泥層で、固くしまり、層中に小片になった瓦を含み地山を掘り込んだ基壇埋土のようである。この埋土上面を切って溝が4条ある。溝規模は幅0.4m、深さ0.1m、埋土は灰色砂層である。溝と基壇遺構は相互の埋土の状況から同一時期の遺構と思われる。この基壇埋土状の土層は99.5mまで続く。④二条大路路面 115m から路面状の遺構を検出した。GL -0.9m ~ 1.3m にかけて灰褐色礫層があり層中に多量の瓦、石と細砂がつまり固くしまっている。この路面状の遺構は124m前後まで続いている。これから南地点は近世の花崗岩で護岸した南北溝が走り、路面状遺構は破壊されている。

**遺物** 整理箱に15箱出土した。主要な遺物は、1区の115m ~ 124m にかけて検出した路面状遺構に含まれていたもので瓦を主体とする。平安時代中期、後期の軒平瓦3点、鬼瓦1点である。他に攪乱層から採集した近世陶器、塩壺などがある。

**まとめ** 1区で検出が予想される遺構には式部省南限築地、平安宮南限築地、宮南隍、二条大路南側溝、二条大路南築地などがある。調査で検出した遺構は溝、基壇状遺構、路面状遺構が各1基である。91.6m で検出した溝は、掘削溝の両断面で検出された溝と推定が可能である。溝と路面状遺構の間で検出した基壇状遺構は幅が約3.2mあり地山を僅かに掘り窪めて砂を詰めている。更に幅0.4m、深さ0.1mの浅い溝を4条掘ってまたすぐ埋めている。これらの状況からみてこの遺構を築地の基壇とみることができる。基壇状遺構南部には基壇埋土と同様の土層が薄くなりながらも続いておりこの土層を宮南隍との間の埴地と推定できる。埴地南部に存在すべき宮南隍は幅5.0m、深さ基壇上面から-0.4mの攪乱で未検出である。

(百瀬正恒)

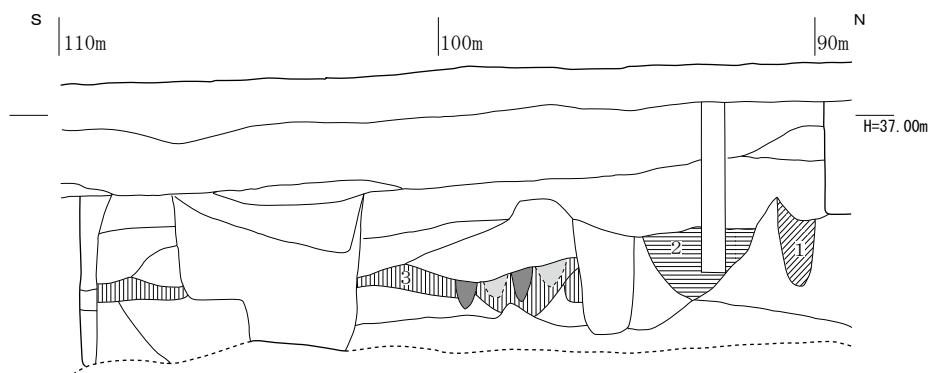


図5 1区南北縦断面図(縦1:40, 横1:200)

### 3 左京五条二坊

表4 -10

**経過** 調査地点は、平安京左京五条二坊にあたり、東大宮大路、猪隈小路、堀川小路、四条大路、綾小路、五条坊門小路の検出が予想される地点であった。調査地は西が大宮通、北は四条通、東が堀川通、南は仏光寺通に囲まれた所で、関連する町名は、松本町、瀬戸屋町、妙満寺町、雁金町であった。工事は上水道老朽化に伴い埋設管を交換すべく各通り（綾小路通、黒門通、猪熊通、岩上通）にわたり掘削が行われた。

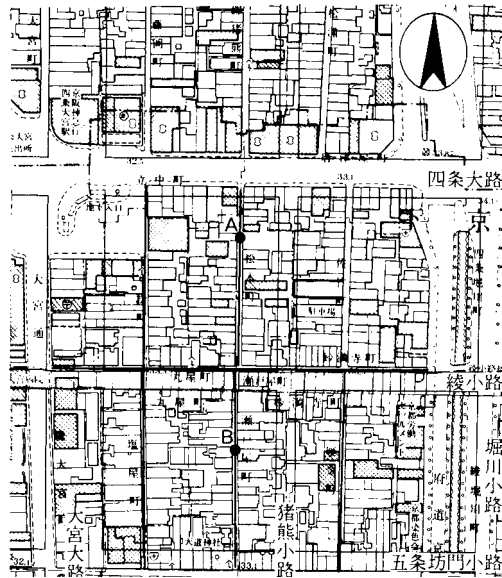


図6 調査位置図 (1 : 5000)

調査期間は、昭和56年4月28日～5月24日であった。調査の内容については、位置図の中に付したA地点、B地点を中心に述べる。

**遺構** 猪熊通、四条通交差点の南30m～40mのA地点で幅10m、深さ0.8m～1mの間に、鎌倉時代前期の遺物を多量に含む土壌があった。内容は土師皿を中心として灰釉陶器の風字硯もみられた。他に少量の土師器片（鎌倉時代）を含む包含層が認められた。

**遺物** 土壌から出土した風字硯は、陸部分の半分があり、灰釉陶器である。焼きは堅く裏面はヘラ削りされている。陸部は使用痕がほとんどなく、釉の吹き出しが残り、脚は欠落している。他の遺物としては鎌倉時代前期の皿などの日用雑器も多く認められ、これと共伴していた。またB地点では、六角形に面取りした平安時代前期の高杯が認められた。

**まとめ** 今回の調査で検出した鎌倉時代前期の土壌は、条坊区画の東北部にあたる。そのことから付近には、建物などの遺構が存在する可能性が十分に考えられ、今後の調査に一資料を与えることができた。

(吉村正親)

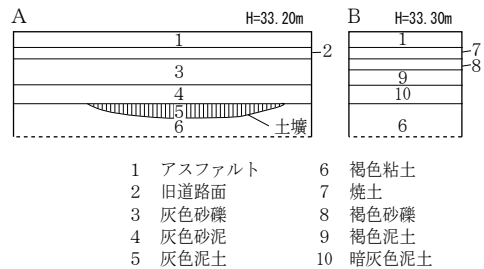


図7 調査区土層断面図 (1:100)

#### 4 左京九条三坊

表4 -16-19 図版3 - 1・2

**経過** 調査地点は、平安京の左京九条三坊のほぼ中央にあたり、町尻小路、室町小路、九条坊門小路、信濃小路、九条大路の検出が予想される地点であった。調査地は、東寺東門通が竹田街道に延びる所で、京都駅の真南にあたり小さな路地の発達した所となっている。調査期間は昭和56年12月1日～昭和57年2月10日であった。調査で知り得た主要な地点の中で、特にE地点を中心に概説して行くことにする。

**遺構** 北より南に向かって、砂礫層が0.5m～1mあり、全体を広く覆っていた。東部では、平安時代末期より水田として長く利用されたと考えられ、埋土の下に灰色泥土が認められる。A、B地点では南北方向の杭と側板で作られた水路があった。またE地点では、幅2mの南北溝が検出された。この溝は室町通と斜交差している。内部は灰色泥土層がほとんどで、13世紀中頃～14世紀の土師器片を多量に含むもので、これ以後も溝は南で検出できる予定であったが、浅い掘削深と攪乱が多く、ついに認めることはできなかった。

**遺物** E地点において検出した南北溝に堆積する灰色泥土層から13世紀～14世紀の土師器が多量に出土し、この他にも瓦器碗、須恵器鉢、箸、木片などが認められた。

**まとめ** この地は、平安後期になり、九条師輔邸、施薬院、藤原実行邸、藤原顕頼卿堂、相国堂などがあり、藤原氏一族(九条家)関係の邸宅が多く造られたことが文献で判る。付近は、都市再開発に伴う発掘調査で大きな成果があがっている所であり、今後の詳しい調査が必要である。

(吉村正親)

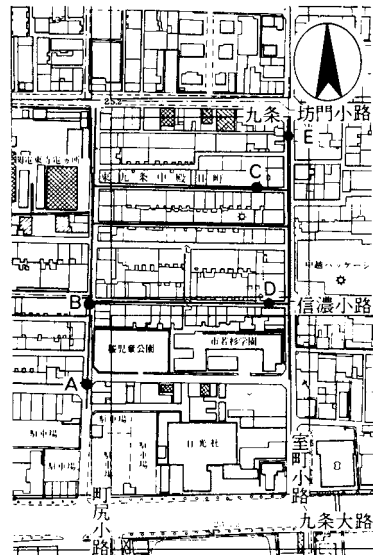


図8 調査位置図 (1:5000)

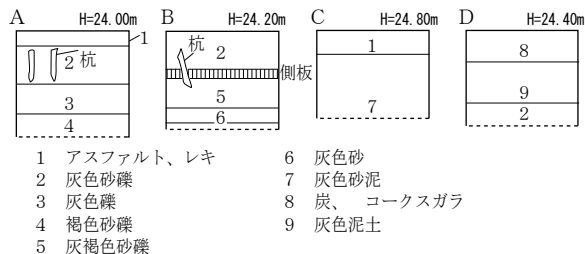


図9 調査区土層断面図(1:100)

## 5 右京北辺二・三・四坊，一条二・三・四坊と北野廃寺，北野遺跡

表4 -14 図版4 -1・2

**経過** 調査地は，丸太町通以北，北区紅梅町以南，東西を西大路通と宇多川支流に囲まれた地域で，当該地は北野廃寺，北野遺跡をはじめとして平安京右京北辺二・三・四坊及び一条二・三・四坊にあたる。調査においては，各条坊の側溝・道路跡の変遷を捉えることに主眼をおき，また北野廃寺及び北野遺跡の広がりを押さえることに注意を払った。調査の結果は，条坊に関する遺構として馬代小路東側溝及び西側溝，道祖大路西側溝，一条大路北側溝を検出することができた。また北野廃寺の西限を画すると考えられる溝を1ヵ所検出している。調査期間は，昭和56年10月10日～昭和57年8月20日まで実施した。遺構総数は103，出土した遺物は遺物箱にして56箱であり，時代は弥生から近世に及ぶ。

**遺構** 遺構総数103の内訳は，土壙67，溝27，井戸2，柱穴3，性格不明4である。遺構の年代は弥生後期から室町後期までである。条坊に関連する遺構としては，一条大路北側溝を3ヵ所，馬代小路東側溝を3ヵ所，同じく西側溝を2ヵ所，道祖大路西側溝を1ヵ所で検出している。いずれも平安前期～中期の土器類が出土している。井戸跡は2基検出したが，共に縦板組みの平安中期のものである。弥生～古墳前期の遺構は土壙と溝状遺構で，それぞれ北野遺跡内，大將軍一条町で検出した。北野廃寺の寺域を画する西限の溝と考えられる南北溝を1ヵ所検出しているが，従来推定されていたライン上に重なる。

なお，府立体育館東部，大將軍一条町周辺では，東西200m，南北300mの範囲にわたって火山灰層の堆積を確認している。

**遺物** 大將軍一条町で検出した古墳前期の溝状遺構からは，甕，壺，高杯などが一括して出土している。平安前期の土器類には土師器の杯，皿，椀，甕，須恵器の杯，蓋，甕，緑釉陶器の椀がある。平安中期の土器類には土師器の杯，皿，甕，須恵器の杯，壺，甕，鉢，緑釉・灰釉陶器の椀，黒色土器Aタイプの杯などがあった。特に一括性の高い出土遺物としては，馬代小路東側溝（S D21）出土のものがある。S K48からは「野寺」と墨書された平安前期の土師器皿が出土している。

**まとめ** 全般に調査対象地は後世の攪乱・削平が著しく，平安時代の遺構，遺物包含層の遺存状態はよくなかったが，その中でも道祖大路西側溝，馬代小路東西側溝などが検出され，最近，問題とされるようになった右京の条坊の地割を考える上で貴重な資料を得ることができた。また，北野廃寺の西限を画すると考えられる南北溝の検出は，今回の調査



において始めて確認されたもので、当寺院跡の規模・伽藍配置などを考える上で重要な発見であるといえる。なお、今回確認された火山灰層は現在の所「始良T n 火山灰」<sup>注</sup>と推定される。

(家崎孝治)

注 町田洋, 新井房夫「広域に分布する火山灰—始良T n 火山灰の発見とその意義—」

『科学』46(6)1976

表1 出土遺構一覧表

番号	遺構	規模(m)		標高(m)	遺物	時期	備考
		幅	深				
1	SD-01	2.35以上	0.25	51.1	土師器・緑釉陶器	平安中期	
2	SK-02	2.00以上	0.6	52.3	土師器・須恵器	平安中期	
3	SK-03	1.16	0.42	51.5	土師器・須恵器・瓦・緑釉陶器	平安中期	
4	SE-04	1.34	2.6	50.6	砥石・土師器・瓦・灰釉陶器 緑釉陶器・黒色土器・木器片	平安中期	
5	SE-05	3.04	1.96	52.3	土師器・須恵器・瓦・ 黒色土器・灰釉陶器	平安中期	
6	SD-07	1.20	0.21	51.6	土師器・須恵器・瓦	平安中期	
7	SD-08	0.85	0.35	51.8	土師器・須恵器	平安中期	
8	SD-09	3.26	0.66	54.2	土師器・瓦	平安中期	
9	SD-10	4.70	0.9	54.9	須恵器	平安中期	
10	SD-11	1.48	0.27	50.3	土師器・須恵器	平安中期	
11	SD-12	1.48	0.31	50.8	土師器・須恵器・瓦	平安中期	
12	SD-13	2.12	0.44	51.0	土師器・須恵器・緑釉陶器 灰釉陶器	平安中期	
13	SD-15	1.06	0.45	53.1	土師器・須恵器	平安前期	道祖大路西側溝。
14	SK-16	0.8	0.25	53.2	土師器	平安前期	
15	SD-17	7.20以上	1.00	56.0	古式土師器	古墳前期	
16	SK-18	1.00以上	0.24	54.9	土師器・須恵器・緑釉陶器 灰釉陶器	平安中期	
17	Pit-19	0.5	0.29	51.6	土師器・須恵器・瓦・鉄滓	平安中期	
18	SD-21	1.3以上	0.34	53.3	土師器・瓦・須恵器	平安前期	馬代小路東側溝。
19	SX-22	6.07	1.6以上	53.8	土師器・須恵器・緑釉陶器	平安中期	
20	SD-23	1.8以上	0.34	53.8	土師器・瓦	平安前期	馬代小路東側溝。
21	SK-24	1.22	0.41	53.6	土師器・緑釉陶器	平安中期	

番号	遺構	規模 ( m )		標高 (m)	遺 物	時 期	備 考
		幅	深				
22	SD-29	2.3	0.4	45.4	土師器・須恵器・緑釉陶器 灰釉陶器・黒色土器	平安前期	
23	SD-30	1.3 以上	0.3	45.3	土師器・須恵器・緑釉陶器	平安	
24	SK-33	3.41	0.7	45.7	土師器・須恵器・陶器	平安	
25	SK-34	1.2 以上	0.5	46.1	土師器・須恵器・灰釉陶器	平安	
26	SK-35	1.0	0.4	51.1	土師器	平安前期	
27	SX-36	南西 9.8 以上 南北 4.7 以上	0.8 以上	51.2	土師器・須恵器・緑釉陶器 瓦	平安前期	
28	SD-37	1.3 以上	1.4 以上	51.2	土師器・須恵器	平安前期	馬代小路東側溝。
29	SD-38	1.5 以上	1.2 以上	52.0	土師器		馬代小路西側溝。
30	SD-39	1.7 以上	1.0 以上	54.5	土師器		馬代小路西側溝。
31	SD-40	7.7	0.9 以上	56.7	土師器		一条大路北側溝。
32	SD-41	8.0	1.05	56.6	土師器		一条大路北側溝。
33	SD-42	5.0 以上	1.2	56.7	土師器		一条大路北側溝。
34	SK-43	2.6	0.9 以上	57.4	須恵器	古墳末期	
35	SK-44	0.8 以上	0.35	59.5	弥生土器	弥生	
36	SD-45	3.45	0.7	60.2	土師器・須恵器・瓦 緑釉陶器	平安中期	
37	SK-46	2.2	0.3	59.2	土師器	平安中期	
38	SX-47	11.0	1.7	58.8	瓦		
39	SK-48	3.4	0.6	59.0	土師器・瓦	奈良末期 ~平安初期	墨書土器出土。
40	SK-49	2.8	0.7	59.1	土師器・瓦	奈良末期 ~平安初期	
41	SK-50	3.3 以上	1.2	59.1	土師器・瓦	奈良末期 ~平安初期	
42	Pit-52	0.6	0.4	59.7			北野廃寺第3 次調査検出の 建物の一部。
43	SK-53	1.5	0.4	60.0	土師器	平安中期	
44	SK-54	1.0	0.4	60.4	土師器	平安中期	
45	SK-55	1.8	0.3	60.2	土師器・瓦	平安中期	
46	SX-56	4.4	0.35	60.5	瓦		
47	SK-57	1.65	0.6	60.9	瓦・土師器・須恵器	奈良末期 ~平安初期	
48	SK-58	0.75	0.16	61.3	瓦・土師器・須恵器 緑釉陶器	平安前期	
49	SK-59	0.7	0.1	62.2	瓦		

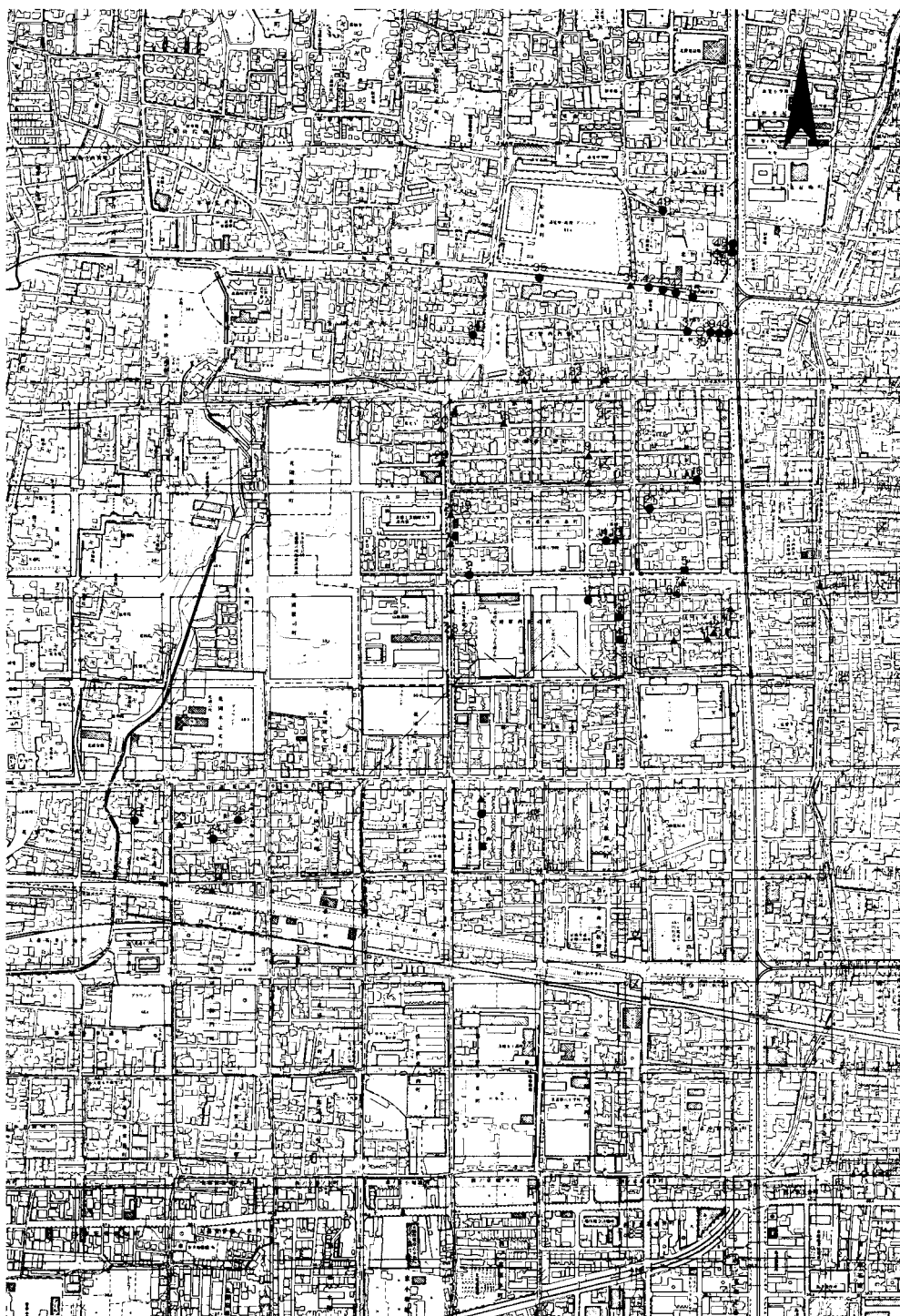


图 10 出土遺構分布图 (1:10000)

## 6 右京三条一坊

表 4-15

**経過** 調査地は平安京右京三条一坊にあたり、西櫛筒小路、二条大路、押小路、三条坊門小路、などの条坊遺構の検出が予想された。調査地は西ノ京船塚町、永本町、西月光町、東月光町にまたがり、調査期間は昭和56年4月21日～7月30日にかけて実施した。調査にあたっては、通りによって1～7区に分け、各々「0」点を道路上に明記し5mごとに割りつけを行った。1区、3～6区は攪乱がひどく良好な包含層、遺構、遺物は検出できなかった。ここでは2区と7区について報告する。

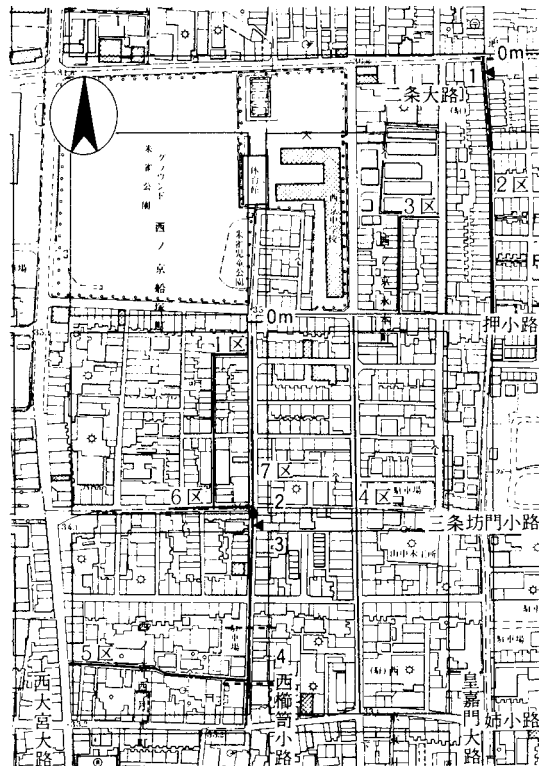


図 11 調査位置図 (1:5000)

**遺構** ①平安時代、溝 2区6.1m～8mにかけて溝状遺構を検出した。溝は2時期あり当初は幅1.9m、深さは0.7m以上の規模で次に幅0.6mとせばめられ、深さも0.5mとなる。古い溝から瓦を多数採集した。溝南部の土層は路面、耕作土、灰色砂層となり次に、灰黄色砂か灰黄色粘土の地山となる。遺構、遺物包含層は検出していない。②路面状遺構 7区の127.5m～135mにかけて路面状遺構がある。層は灰褐色砂泥層で厚さ0.1m、直径2cm～5cmの礫を多量に含んでいる。この上層は茶灰色砂泥層で、須恵器、緑釉陶器などを含んでいる。検出地点は三条坊門小路にあたり、路面の可能性が高い。③溝 7区137.1m～138.0mにかけて溝状遺構がある。埋土は暗灰色泥砂で出土遺物はなかった。溝上層には、前期の茶灰色砂泥層が堆積している。④遺物包含層 7区202m～240mにかけての第3層茶灰色砂泥層中には、土師器、須恵器、灰釉陶器などが含まれ9～10世紀にかけての遺物包含層と思われる。この包含層下層には黒色泥土、暗灰色泥土などの泥土層が堆積し、沼状を示すが遺物の出土はなかった。

**遺物** 全体で整理箱2箱の遺物が出土した。遺物がまとまって出土したのは、2区①の

溝出土の瓦と7区④出土の土器類である。7区④からは土師器杯、甕、羽釜、須恵器鉢、壺、瓶子などが出土し9世紀後半から10世紀初頭の年代を示すが、小破片のものが多。他に、2区で平安後期の軒丸瓦1点を採集した。径11.4cmの左回り巴文で色調は暗灰色、胎土は粘質で焼成も良好であった。

**まとめ** 全体に攪乱が多く、遺構、包含層の遺存状況は良くないが、2区で溝、7区で路面状遺構、溝、包含層を検出できた。2区の溝は二条大路北側溝と推定することが可能であり、発掘調査において不明であった北溝の検出を補うことができる。更に7区検出の路面状遺構、溝も三条坊門小路南側溝推定位置と合い、条坊遺構と推定される。

(百瀬正恒)



図13 調査風景

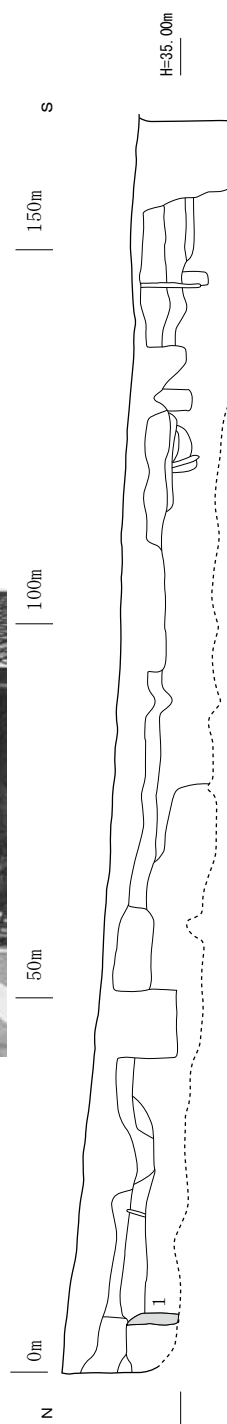


図12 2区南北縦断面図(縦1:100, 横1:1000)

## 7 右京四條二坊

表4-16-9 図版5-1・2

**経過** 調査地は平安京右京の四條二坊で、西堀川小路、六角小路、四條坊門小路、錦小路、四條大路などの条坊遺構の検出が予想された。調査地は、三条～四條通間、西は西大路通、東は京福電鉄線路までの広い地域であったが、西大路通東歩道、四條通北歩道は夜間工事であったため、夜間工事部分を除きA～D区、F～H区までの7区に分けた。調査期間は、昭和56年12月17日～3月31日までである。A区、C区、H区を除く各調査区では流路を検出した。

**遺構** 平安時代の文献史料によれば、調査地内を流れる大規模な流路は、紙屋川の水を西堀川小路中央に川を掘って流したと考えられる西堀川だけが予想されたが、この他にいくつもの流路を検出した。①流路 京福電鉄西側南北道路の調査区であるB区全域にわたって検出した。B区は平安京の条坊推定地の西堀川小路にあたり、検出した流路も西堀川である。流路埋土はGL-0.4m～1.1m前後までが褐色砂礫層、灰褐色砂礫層、褐色砂層などの砂、礫を主体とした埋土で、GL-0.7m～1.5mまでが茶灰色泥砂層、暗灰色泥砂層などの泥砂を主体とした埋土になる。つまり上層は砂礫、下層は泥砂の埋土となっている。各層共に小片の遺物しか出土せず年代は不明である。②流路 D区で検出しB区からは西に約40m離れている。GL-0.2m～1mまでは砂礫層が埋土でこの下層は暗灰色泥砂が埋土になる。下層の埋土から10世紀中葉の土器が多数出土した。③流路 F区六角通で検出した流路。埋土はD区流路と同じである。京福電鉄踏切から西大路通東歩道までの約100mにわたって続き、更に西へ延びる。

**遺物** 整理箱で2箱出土した。D区の流路下層埋土、暗灰色泥砂層から土師器高杯・皿・杯・甕、黒色土器杯、須恵器壺・甕・鉢、緑釉陶器碗、灰釉陶器碗・皿などが出土した。

**まとめ** 各地区で出土した流路の全体像は、はっきりしないが簡単にまとめてみると、D区、B区検出の流路は埋土の状況がよく似ていること、F区ではB～D区にかけて一様

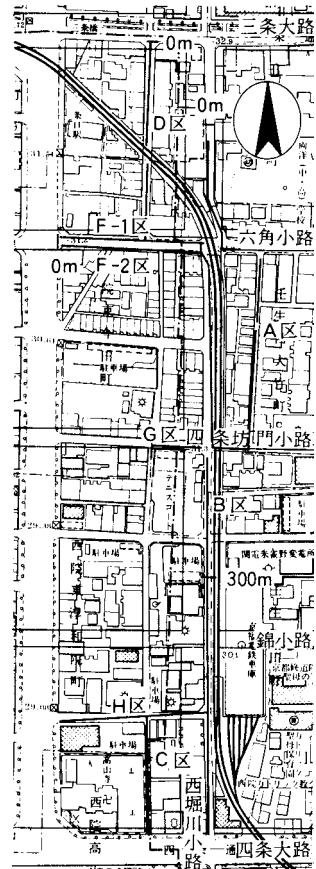


図14 調査位置図(1:5000)

の堆積が続き2本の流路には分かれないうことなどから、1本の流路である可能性があり、西堀川に推定される。またF区で検出した流路は、京福電鉄踏切から西大路通までの100 mにわたって検出でき、更に西に延びると考えられる。この東西100 m以上続く流路を西堀川と推定することもB・D区の状況から可能であるが、F区の南の東西道路G区では、線路から50 m程西までが流路で更に西へは続かない。また更に南のH区では、流路跡はB区との交点以外の部分にはない。したがってF区の流路はそのままの規模で南に続いていない。このことはF区流路が南北方向の西堀川流路ではなく、東西方向の流路であると推定される。西堀川西部には西堀川と同方向（南北）の流路、道祖大路の川がある。F区は六角小路と重なっており、平安時代のいつごろからか西堀川の水を道祖川に落とし込むために六角小路に川を掘ったと考えることができるだろう。川の埋土は西堀川も、西堀川から道祖川へ流れる川も共に上層は砂礫層、下層は砂泥層である。D区でしか流路埋土の遺物を採集できなかったが、遺物は10世紀中葉頃のものである。このことから、平安中期頃までは砂泥の堆積する流れの緩やかな川であったが、それ以降は礫の堆積する流れの急な川に変化している。

(百瀬正恒)



図 15 B区西堀川跡

## 8 右京六条一坊

表4-16-10 図版6-1・2

**経過** 調査地点は、平安京右京六条一坊にあたり西櫛筒小路、皇嘉門大路、西坊城小路、五条大路、樋口小路、六条坊門小路などの検出が予想される地点であった。調査地は、南は五条通、東は山陰線、北は松原通、西は紙屋川に囲まれた所である。調査期間は、昭和56年6月17日～11月30日までであった。調査の内容については、調査区の中で代表的な土層の堆積を示す部分をA、B、C、Dの地点として概説する。

**遺構** A地点の基本土層は-0.5mまでは旧水田層で約1.2mまで褐色～青灰色の泥土層となっていた。遺構の検出はなかったが、時期不明の幅3mの流れを数ヶ所認めることができた。B、D地点は-0.2m～0.6mに灰色～褐色の泥土層があり、この下はすべて褐色礫層となっていた。また、この部分では掘方2.7m、深さ1.5mの方形の井戸を検出した。井戸枠は一辺が1.3mあり、縦板を打ち込み底部を横板によって留めている。D地点は上面に旧路面の互層が存在し、-0.2m～0.65mには水田関係の土壌がみられ、-0.65m以下に地山があった。C地区一帯は、西半部と異なり灰色砂礫層が主体で、全体に大きな流れ堆積の状態を示していた。

**遺物** 出土遺物は、井戸内の泥土層から鎌倉期の土師器片が少量出土したにとどまった。

**まとめ** 付近の地誌には、「故為章領（高階為章）」、「等持院領」などの表示がみられ、近世は中堂寺村の中心部分を形成したと思われる。平安京の衰退の中で、早い時期に田園地帯へと変貌したものと推定される。

(吉村正親)

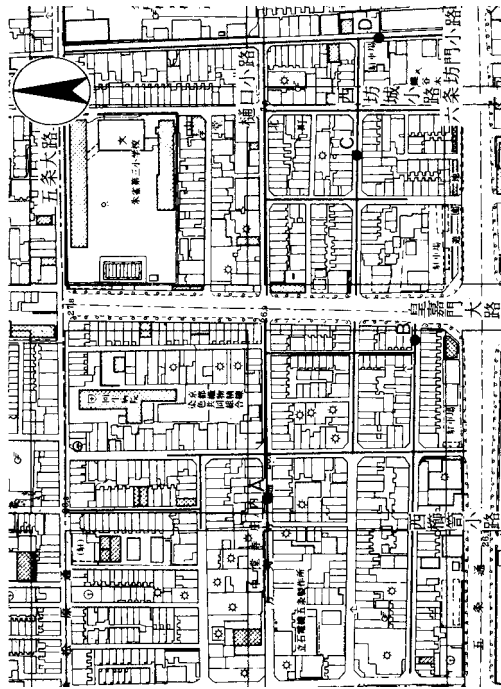


図16 調査位置図 (1:5000)

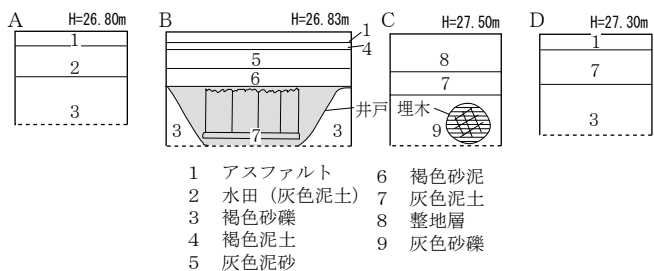


図17 調査区土層断面図 (1:100)



## 9 右京五条二坊・六条二坊

表4-16-11 図版7-1・2

**経過** 調査地点は平安京右京五条二坊、六条二坊にあたり、西大宮大路、西靱負小路、西堀川小路、綾小路、五条坊門小路、高辻小路、五条大路、樋口小路などの条坊遺構の検出が予想された。調査地は西が西大路通、東は御前通、北が四条通、南は五条通に囲まれた地域である。調査期間は昭和56年6月18日～昭和57年3月31日であった。調査にあたっては、調査区全体を「通り」によって1～16の区に分けた。1～5区は南北方向の道路、6～16区は東西方向の道路である。ここでは調査成果のあがった7・10・11・12・16区について述べる。

**遺構** ①西堀川跡 7区の75m～83mにおいては、GL-1.1m～1.6mにかけて木器などを含む暗灰色泥砂層を検出、西堀川小路の河川と推定された。検出部分の東・西共に攪乱が深く河川の広がりについては不明である。②溝 151m～201mにかけて、GL-1.0mで溝状遺構を検出した。埋土は2層になり、上層には黒灰色泥砂層、下層は灰色砂礫層になる。出土遺物は少ないが、平安時代以前と推定されるものである。③溝 10区の14.8m～17.4mにかけて溝を検出した。埋土は2層で、上層は灰褐色泥砂層、下層は灰色砂礫層で、深さは0.7mである。この溝東部から

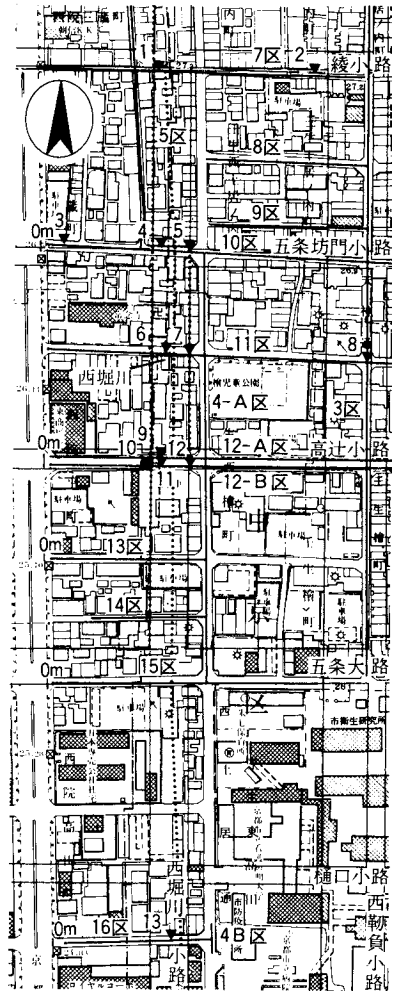


図18 調査位置図 (1:5000)

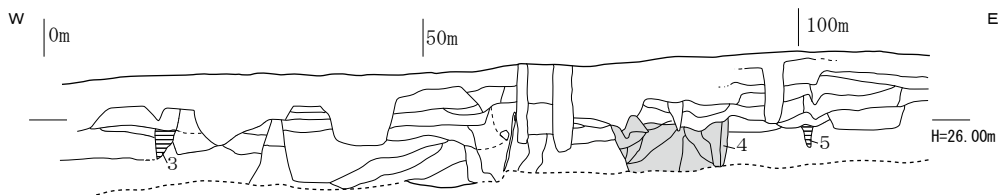


図19 10区東西横断面図 (縦1:100、横1:1000)

西堀川小路にかけては幾つかの大規模な流路が重なって、複雑な状況を呈している。④西堀川跡 75.2m 地点で西堀川西肩を検出したが、この川からあふれ出した厚さ 0.1m の砂礫層は、西肩から更に 12m 西まで検出される。川埋土は灰褐色砂礫層で、深さ 0.6m ある。東肩は 90.8m 地点にあり、西堀川幅は 15.6m になる。東肩部分には、角杭が頭を東に傾けて打ち込まれている。東肩東部にも西肩同様にオーバーフローした砂礫層が厚さ 0.2m あり広がっている。⑤溝 100.7m～102.0m まで幅 1.3m の溝がある。埋土は暗灰色泥砂層で、須恵器が出土した。位置関係から、西堀川小路東側溝と推定される。11 区の西堀川西部も 10 区同様、いくつかの流路が重なっている。⑥西堀川跡 西堀川西肩は 76.7m 地点にあり G L -0.5m～1 m までの 0.5m が川の埋土で灰褐色砂礫層と暗灰色泥砂層が堆積している。この灰褐色砂礫層の堆積は 84.5m まで続くが、跡 88m 地点まで暗灰色泥砂層が西堀川の埋土になっている。87.8m 地点には 10 区同様、頭を東に傾けた角杭が打ち込まれている。⑦溝 西堀川小路東側溝と推定される溝は、98.8 m～99.3 m にかけて検出した。埋土は灰色泥砂層で 0.15m の深さ、上部は 11 世紀代の遺物を含む新しい溝によって切られている。小路東側溝東部には、平安時代の遺物包含層が 113m 地点まで広がっている。この部分の包含層下層は灰色砂礫層で流木を含み、平安京以前の自然流路である。⑧ 215.6m～216.6 m までの 1 m にわたって、深さ 0.3 m の溝状遺構がある。埋土は泥砂、砂礫、泥砂の互層で、砂礫層から小片の土師器が出土した。位置関係から、西堀川小路の東条坊遺構、西靱負小路の西側溝と推定できる。⑨西堀川跡 12-A 区で検出された西堀川は、西肩該当部分の 73.2m～74.8m 地点が攪乱を受けていて、正確には知り得ないが 73.5m 前後の地点に推定できる。75m 地点の西堀川埋土は灰色砂泥層で、11 世紀代の瓦器を含んでいた。76m 地点まではこの埋土が続くが更に東は、攪乱されており東肩は検出できなかった。⑩土壌 12-B 区は 66.5m～71.7m まで 5.2m にわたり土壌状の遺構がある。埋土は暗灰色砂層で深さ 0.3m～0.6m ある。⑪西堀川跡 西堀川西肩は 73.1m 地点にあり、79m 地点までは暗灰色の砂礫層が埋土で、底のレベルは地表下 1.1m～1.2m である。しかし 79m から東部は溝が 0.1m～0.2m 深くなる。87m 地点には東肩がある。12-B 区での西堀川幅は、14.9m である。⑫西堀川小路東側溝 98.4m～99.4m の 1 m にわたり西堀川小路の東側溝がある。深さは 0.3m、埋土は茶灰色泥砂層である。⑬西堀川跡 16 区の 78m 地点までは攪乱で不明。78m 地点から東は西堀川の埋土が続き、東肩は 85.9m 地点にある。この地点の埋土は今までの 7、10、11、12 区と大きく異なり上層は暗灰色泥砂層、下層は暗黒灰色泥砂層で、砂礫層はない。東肩東部はいくつかの溝状遺構があるが、どれが西堀川

小路東側溝にあたるかは不明である。

**遺物** 主要な遺物はいずれも西堀川から出土したものであるが、いずれも細片であり全体を知ることでできるものはなかった。西堀川の年代は、出土遺物から東部が古く、西部が新しいことが知られる。

**まとめ** 広域の立会であったが、主要な成果は西堀川小路と西靱負小路の検出であった。特に各地点で西堀川小路の実体をつかめたことは、大きな成果であった。西堀川小路については、昭和55年秋の発掘調査によって検出されており、小路中央に西堀川があり川東部には約9mの道路面、溝、築地<sup>注</sup>などがある。川幅は約15m、小路の規模は8丈（約24m）であることが判明した。これと今回の立会調査の結果をあてはめれば、西堀川の規模、東側の路面幅など、いずれもよく発掘調査結果と一致することが知られる。川の構造についても、川の東肩部に頭に傾けて杭を打つなどよく一致している。ただ10区で得た西堀川が、東西両方向に溢れていること、平安京造営以前の旧流路上に川が造成されていることは、新たな知見である。

（百瀬正恒）

注 堀内明博「平安京右京五条二坊」『平安京発掘調査報告』昭和55年度（財）京都市埋蔵文化財研究所



図20 12-B区西堀川

## 10 右京七条一坊

表4-16-12 図版8-1・2

**経過** 調査地点は平安京右京七条一坊にあたり、西櫛笥小路、皇嘉門大路、西坊城小路、左女牛小路、北小路などの側溝の検出が予想される地点であった。調査地は、七条通七本松一帯にあって、ほぼ大阪ガス京都工場の南辺である。調査期間は昭和57年3月23日～5月10日に行われた。調査については調査地点をA、B、C、Dと付して行い、各地点別に主な特徴を概説して行くことにする。

**遺構** A地点で、砂泥を主体とするもので-0.26m～0.72mに灰色砂泥層があり、-0.72m～1mには、灰青色泥土層がある。この下層は、青色ないし黄色の砂礫の互層を呈して古い流れとなっていた。B地点は、-0.25mまで整地層となって他の下層全面は灰色の砂と礫からなる互層で、A地点の延長となっている。C地点は、-0.35mまで整地層、-0.35m～0.45mまでは灰色泥土層（旧水田土壌）で、下層には少量の土師片を含む褐色泥土層が厚く堆積していた。D地点、C地点と同様の土層であり、ここに直径1m、深さ1.3mの円形井戸が埋没しており井戸枠は木製の桶で底部はない。掘方は0.2mの余裕があるが、ほぼきっちりと入れ込まれ、内部には一切遺物を含んでいなかった。

**遺物** 出土遺物はC地点の褐色泥土層からの少量の土師片以外は全く検出できなかった。

**まとめ** 七条中学校内では、かつて方形周溝墓や、弥生時代にかけての遺構の検出がみられた部分であった。遺構を構成する基本土層は、褐色泥土層の厚いもので、かなり広く分布していた。この土層

も一様にあるのではなく、中学校の北辺より流路状の砂層に変化していることを確認している。（吉村正親）

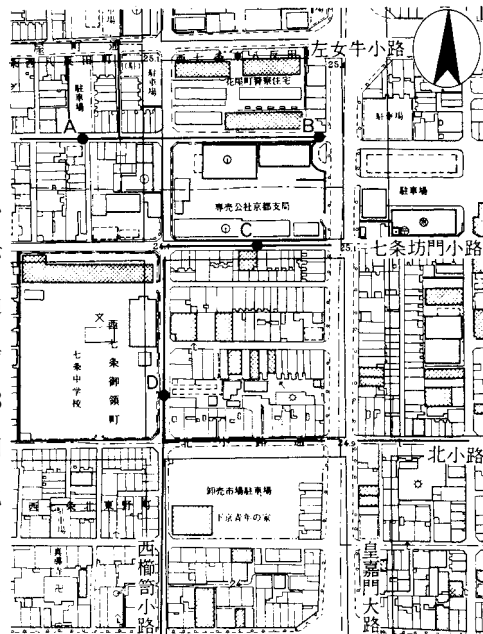


図21 調査位置図 (1:5000)

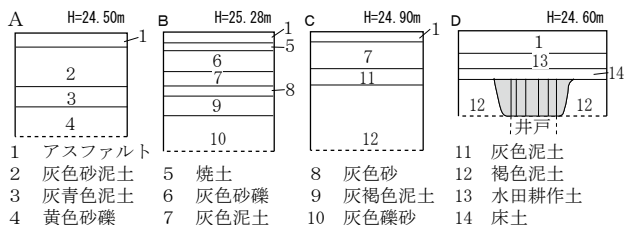


図22 調査区土層断面図 (1:100)

## 11 右京七条二坊（1）

表4-16-13 図版9-1・

2

**経過** 立会調査は、平安京右京七条二坊で、西堀川小路、西靱負小路、西大宮大路などの条坊遺構の検出が期待された。調査期間は、昭和56年11月

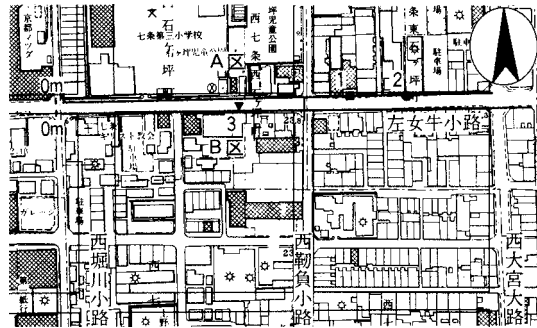


図23 調査位置図(1:5000)

21日～昭和57年2月10日であった。調査は花屋町通りの北歩道をA区、南歩道をB区として行った。

**遺構** 工事連絡の不備から、十分な調査ができなかったが、いくつかの重要な遺構の検出があった。①井戸 A区196.2m～198.3mにかけて平安時代中期の井戸1基を検出した。井戸の形は方形縦板組みで一辺1.1m。GL-0.7mで井戸埋土上面を確認したが、木枠は-1.0m以下に残っていた。木枠内埋土は、暗灰色泥砂、炭層、暗灰色泥土と続き、裏込め埋土は暗灰色泥砂である。GL-1.5mまでは確認したが、以下は不明。木枠内埋土から土器が少量出土した。②土壙 A区234m～236mにかけて土壙を検出した。検出レベルはGL-0.2mで土壙の深さは0.4m、埋土は茶灰色泥砂、出土遺物はなかった。A区の260m地点前後までは灰色砂礫層が地山となるが、260mから東はGL-0.4m前後に灰黄色粘土があり、これが地山になる。③流路 B区の119m～124m地点はGL-0.4m～0.9mまで灰色泥土が堆積し、流路の埋土と思われる。

**遺物** 井戸から検出した遺物は、整理箱に1箱で、土師器の杯・皿・甕、黒色土器A類杯、須恵器甕、灰釉陶器壺、緑釉陶器椀、瓦などであった。年代については10世紀中葉頃と考えられる。

**まとめ** 検出遺構は井戸1基、土壙1基、流路状遺構1条にとどまった。だが、地山が東部に行く程、安定していることが判ったことは成果であった。しかし、西堀川小路、西靱負小路、西大宮大路などの平安京条坊については、検出できなかった。

(百瀬正恒)

## 12 右京七条二坊（2）

表4-16-15

図版10-1・2

**経過** 調査地は、平安京、右京七条二坊にあたり、西堀川小路、西靱負小路、西大宮大路、北小路、七条大路の検出が予想される地点であった。調査地は、下京区七条市部町～北西野

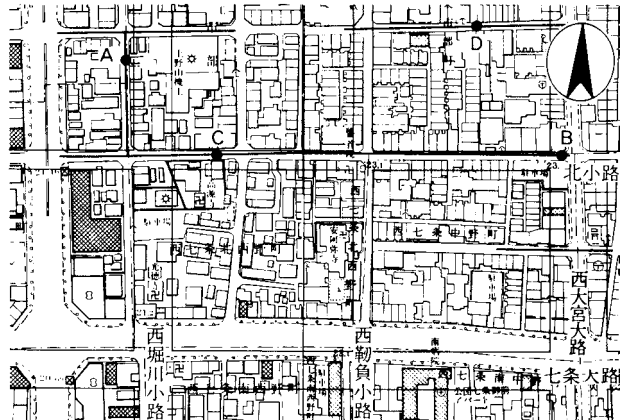


図24 調査位置図 (1:5000)

町にわたり、調査は、昭和57年1月19日～3月31日にかけて実施した。調査の結果知り得た主要な成果について、A、B、C、Dと付して次に概説して行くことにする。

**遺構** A地点は、SE01と付した井戸跡で、縦板を横木で止めてあり、一辺は1.1m、深さは約1.66mあった。B地点は、御前通西部で検出した幅2.65mの溝SD01で、-0.8m～1.2mの間に褐色砂層を切って存在し、灰色泥土層で埋まっていた。これは西大宮大路西側溝と考えられる。C地点の基本土層は砂層と砂礫層が卓越しており、西堀川の流路の一部とも推定されるが、明確な流路跡はなく不明である。D地点は、この地区で最も多くみられた基本土層である。

**遺物** A地点のSE01から、9世紀と考えられる土師器の皿が検出され、またB地点のSD01では、灰色泥土層から平安時代の布目瓦を検出している。

**まとめ** 西堀川は、四条と五条の間で確認<sup>(P19)</sup>され、ほぼ二つの時期に分かれる。主として砂礫を含む層で、幅広くなり14m～15mの計測ができています。当然調査地内でもこの状態がみられるものと予想していたが、僅かに砂礫の多い部分を確認するのみであった。

また、西市跡にも近いため関連遺構を探した。その結果、時代的に近いものとして井戸を検出したにとどまった。

(吉村正親)

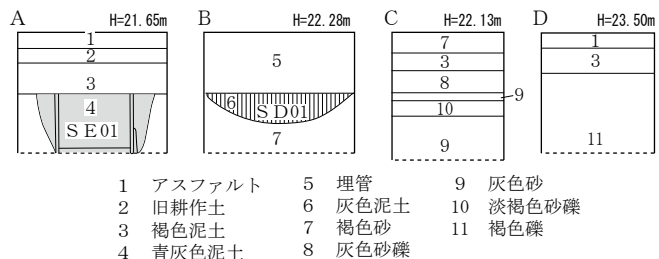


図25 調査区土層断面図 (1:100)

### 13 右京八条二・三坊

表4-16-16 図版11-1・2

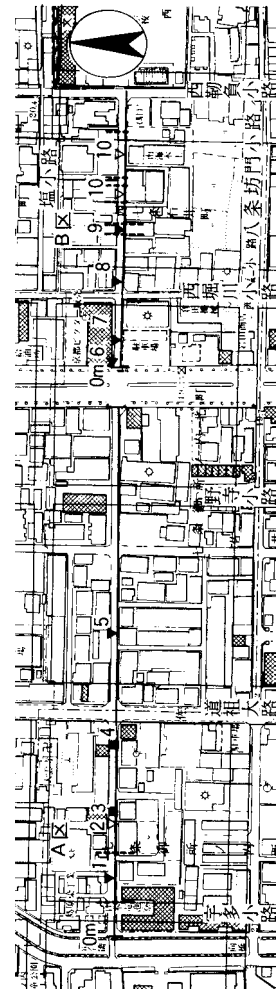
**経過** 調査地点は、平安京条坊の右京八条二・三坊にあたり宇多小路、道祖大路、野寺小路、西堀川小路、西靱負小路などの道路遺構の検出が予想される所であった。調査は掘削地点が東西方向の道路で、南北方向の幹線道路、西大路通で分断されているため、西大路通西をA区、東をB区とした。A・B区の「0」点はAが西高瀬川東岸、Bが西大路通の東歩道西端とした。A区は350 m、B区は175 mある。調査期間は昭和56年9月18日～10月28日であった。

**遺構** ①平安時代前期、溝状遺構、A区の25 m～57.5 mにかけて、溝状遺構がある。深さ0.7 mで上層から、暗灰色砂泥層、灰色砂層、暗灰色砂層が埋土になる。各層からは木片が出土、最下層の暗灰色砂層からは、平安時代前期の土師器、須恵器が少量出土した。②古墳時代、遺物包含層、A区75 m地点に灰色砂礫層を切って、淡茶灰色泥砂層が堆積している。この層中からは小片の古墳時代と思われる土師器が出土した。

③平安時代後期、1号井戸、A区84.6 m～85.7 mにかけて検出した。形は方形の縦板組みで、一辺は内法で1 m程あり、側板は各辺とも2枚の板を立てている。井戸内の埋土は、3層に分層され中層の暗黒灰色砂泥層から、大量の土師器を出土した。図26 調査位置図(1:5000)

④平安時代中期、2号井戸 A区129 m～132 mにかけて井戸を検出した。形は前記の井戸同様、方形の縦板組で、一辺の長さは0.9 m、GL-0.3 mが井戸掘方上面で、底は-1.4 mである。井戸内埋土は、褐灰色泥砂層と暗灰色泥砂層で各層から土師器が出土した。この井戸下層からも、位置をやや東にずらした井戸を検出した。東辺に僅かに縦板が残存していたが、西辺にはなかった。また方形の木枠は東西共に残っていたことで古井戸と推定できる。一辺は0.9 mになる。出土遺物はなかった。

⑤溝状遺構、A区200 m前後から東部はそれまでの砂礫層の堆積から泥土層の堆積に変わる。202 m～207.5 mにかけて暗灰色泥土を埋土とする溝状遺構がある。溝中には杭が



2本打ち込まれていた。溝中からは出土遺物は少なく時期は不明であった。⑥平安時代中期，溝西大路通東歩道上で，第4層の灰色砂礫層と第5層の茶灰色砂層がブロックになる層から多量に9世紀後半の土師器，須恵器が出土した。この第4・5層は南部に広がる茶灰色泥砂層と切り合い関係を持つようだが，詳細は不明。埋土の状態から溝と推定できる。⑦平安時代，西堀川小路川跡，B区の西大路通りから20m地点前後までは暗灰色，灰色泥土層が厚く堆積しているが，それから東部は褐色砂礫層の堆積がみられるだけで泥土層はない。泥土部分は西堀川小路川跡かと思われる。⑧溝状遺構，B区58.2m～60mにかけて溝状遺構がある。暗灰色泥砂層が埋土になり出土遺物はない。⑨溝状遺構，B区92.2m～108mにかけて溝状遺構を検出した。埋土は2層に分かれて上層は暗茶灰色泥砂層，下層は淡灰色泥砂層となる。GL-0.1m～0.9mにかけて堆積している。⑩古墳時代前期，遺物包含層，B区113m～124m，128m～157mにかけては，GL-0.3m～0.6m間の第3層に淡茶灰色泥砂層が堆積

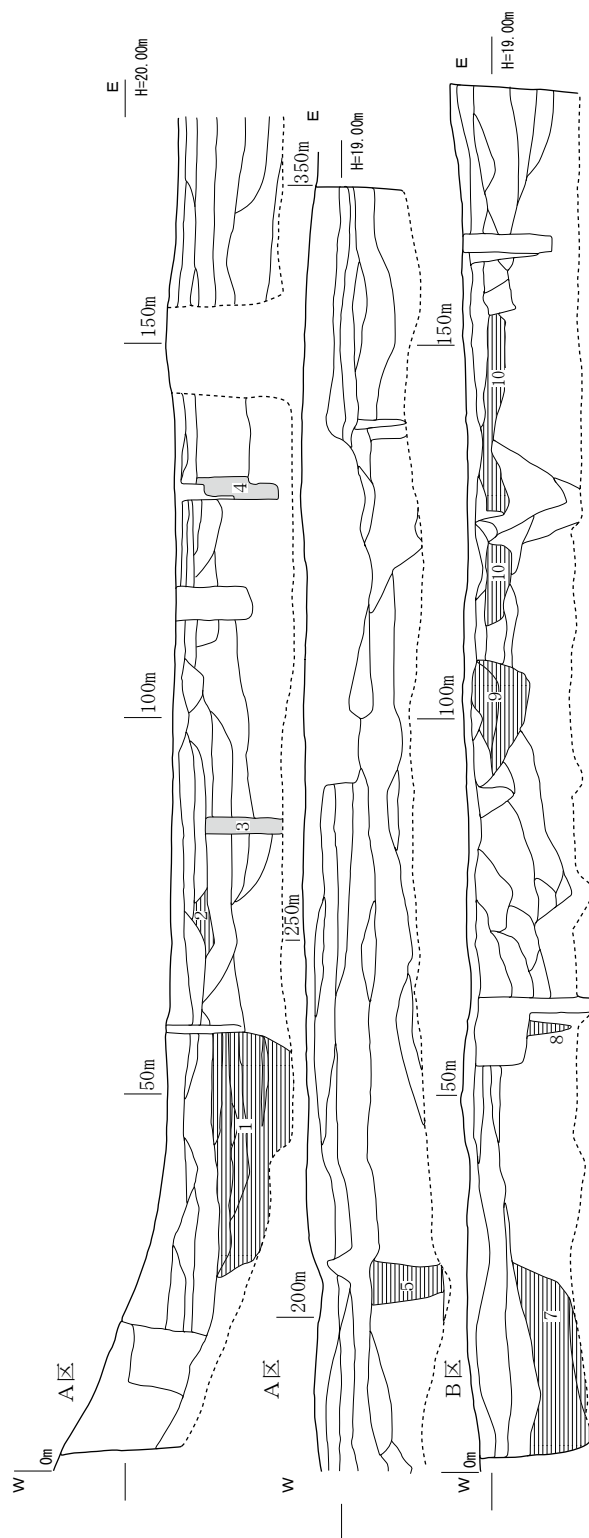


図27 東西横断面図(縦1:100, 横1:1000)



しており、中から古墳時代前期（布留式）の土師器が出土した。157 m～161.4 mにかけては、GL-0.3 m～0.6 mに暗茶灰色砂泥層があり、9世紀後半の土師器が出土した。

**遺物** 全体で整理箱2箱の遺物が検出された。古墳時代前期の遺物は広範囲に出土することを確認できたが、出土量は少なく、その器形も甕、壺、高杯などがあるが、セット構成は明らかにできない。平安時代の主要な遺物は、溝1条、井戸2基から出土したもので、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、石帯などがある。1号井戸は11世紀中葉、2号は10世紀中葉ではほぼ1世紀の年代差がある。1号の器種構成は、土師器に灰釉陶器壺が1点含まれるだけで緑釉、灰釉陶器などを含む2号井戸に比べ、器種構成が貧弱である。

**まとめ** 調査地は、平安京西市跡の南西部の右京八条二・三坊にあたる。A区検出の井戸は1号井戸が11世紀中葉、2号井戸は10世紀中葉で相互に55 m離れている。1号井戸は条坊のほぼ中央に位置しており、2号井戸は道祖大路西側溝から15 m程西に位置している。井戸が東西に並んであることから、平安京内の町割りの実体を示すとも考えられるが、調査が線の調査であるため、詳細は不明である。条坊遺構については、明確なものを検出できなかった。ただ宇多小路東側溝の推定地から更に東部にかけては平安前期の流れが広がっている。道祖大路の部分は調査したが、条坊遺構は検出されなかった。西堀川小路の西部には、泥土を埋土とする大規模な流路が広がっている。また、古墳前期の遺物包含層をA・B区共に検出した。出土した資料は少なく、セットの構成も明らかではないが、明確な包含層を確認し得たことは重要な成果であった。これは西市跡の南西部に広がっている衣田町遺跡（弥生時代～古墳時代）が更に南に広がっていることを事実で示したものである。

（百瀬正恒）



図28 調査風景

## 14 右京九条二坊

表4-16-17 図版12-1・2

**経過** 調査地は、御前通の八条～九条間で、平安京西大宮大路に推定されている所である。調査は期間中に夜間工事などもあり、全域にわたって十分な成果を挙げられなかった。御前通東歩道をA区、西歩道をB区として調査を行った。

**遺構** ①古墳時代流路、A区の130m地点ではGL-0.8mまで攪乱、この下層は青灰色泥砂層、灰褐色砂層となる。165m地点では攪乱層、灰色泥砂層、褐色砂礫層、灰色泥砂層となる。210m地点においてはGL-0.8mまで攪乱、以下青灰色泥砂層、302m地点では耕作土、淡茶灰色泥砂層、灰褐色砂礫層となる。これらの堆積はいずれも河川の埋土であり、この地点に流路があったことがうかがえる。出土遺物はなく、流路の年代は不明であるが、後記と同一流路)と思われる河川の東肩部から古墳時代前期～中期の遺物が出土<sup>(P.32)</sup>しているから、この流路も古墳時代のものであろう。B区もA区同様、流路埋土の土層を検出したが、この埋土を切って成立している平安時代中期の井戸を2基検出した。

②平安時代中期、井戸、B区175m地点から1.4m西の地点で検出した。井戸掘方は幅1.6mで、深さGL-1.4mまで調査した。井戸構造は井戸③と異なり、一辺0.83mの方形横板組みであった。井戸埋土は上部が灰色泥砂層で、井戸枠内は灰色砂泥層が堆積していた。出土遺物は各層から10世紀中葉の土器、瓦が出土した。③平安時代中期、井戸、B区214.8～216mにかけて井戸を検出した。一辺0.9mの方形縦板組みの井戸。井戸埋土はGL-0.4mから始まっている。上層は灰色泥砂層、下層は暗灰色泥砂層で、

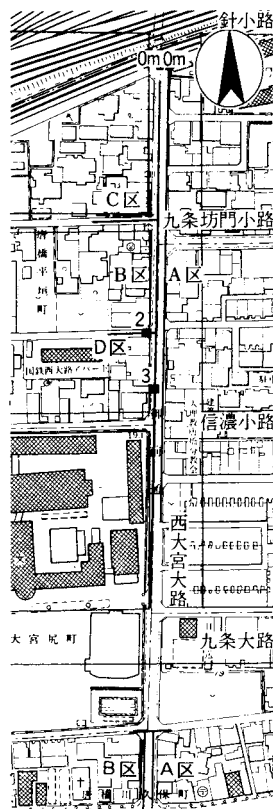


図29 調査位置図 (1:5000)

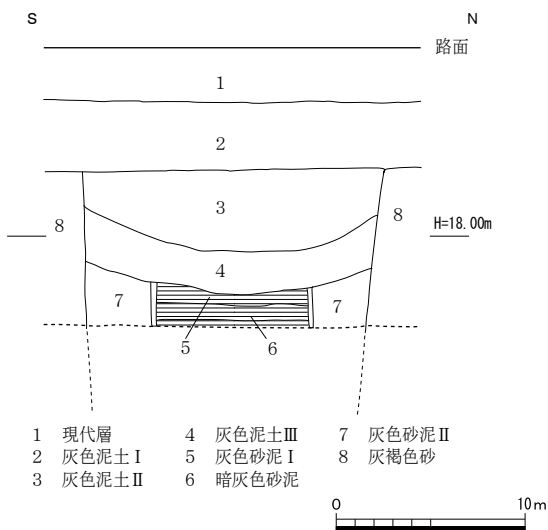


図30 井戸2断面図(1:40)

木枠は下層部分が残っている。10世紀前半の土器が多量に出土した。

**遺物** 全体で2箱の遺物が出土した。井戸②からは土師器杯、皿、甕、羽釜、黒色土器A類椀、B類椀、須恵器短頸壺、鉢、灰釉陶器、白色土器の高杯、軒丸・軒平瓦などが出土した。遺物の年代は10世紀中葉頃である。井戸③からは土師器杯、皿、羽釜、甕、須恵器椀、杯、壺、黒色土器A類椀、灰釉陶器壺などが出土した。これらの遺物は10世紀前半頃の遺物である。

**まとめ** 御前通の北部は古墳時代と推定される旧流路が広がっている。しかし平安時代には、西大宮大路が設定されたと推定される。しかしB区で検出した井戸2基はいずれも西大宮大路の路面内に、入り込んでいる。これがどのようなことを意味するかは不明であり、今後検討する必要がある。古墳時代の流路は、西寺跡を中心に広がっている西寺下層遺構に関連する遺構である。この流路は今回の調査で「0」地点とした国鉄横断地下道南部から300m地点までは広がっていることを確認したが、御前通の440m～495m地点では路面直下が黄灰色泥砂層の地山層で、流路は確認し得なかった。したがって300m～440mの間で御前通から振れて行くと思われる。御前通九条では検出されず、西寺跡の調査でも未検出であったから洛陽工業高校の西部に広がって行くものと推定される。

(百瀬正恒)



図 31 B区井戸2



と暗灰色砂泥が埋土になる。出土遺物はなかった。④平安時代、九条大路北側溝、1区  
 の94.7 m～97.1 mにかけても溝がある。規模は幅2.4 m、深さ0.3 m、瓦を含む茶灰色泥  
 砂が埋土になる。この溝の南肩と北肩の間には攪乱が2ヵ所あり、溝幅すべてが同時期の  
 のものはっきりしない。埋土は同じであるが、溝底のレベルが異なっており、2時期の溝  
 の可能性もある。この溝は、九条大路北側溝の推定位置とよく合致し、大路北側溝と考え  
 られる。⑤平安時代、溝、122.1 m～122.9 mにかけて攪乱によって南肩を切られた溝  
 がある。深さ0.3 mの埋土は、南部が茶灰色泥土で、北部は淡茶灰色泥砂であり、茶灰色  
 泥土が新しい溝である。瓦が1点出土した。⑥、⑦溝、126.1 m～126.9 m、127.8 m～  
 128.5 mにかけて2条の溝がある。規模は、幅が0.8 mと0.7 m、深さは共に0.3 m、埋土は  
 灰色泥砂層と同じである。⑧溝、136.5 m～137.2 mにかけて溝がある。規模は、幅0.7  
 m、深さ0.2 mで淡茶灰色泥砂が埋土になる。⑨溝、153.8 mから南部にかけて大規模  
 な溝がある。溝は耕作土直下から始まり、GL-1.0 m～1.1 mが底になる。埋土は上層が  
 暗茶灰色砂泥、下層は茶灰色砂泥である。175 m地点で⑨溝の埋土第2層から瓦、土師器  
 が出土したが、細片で年代までは明らかにしがたい。この溝は182 mまで確認(28.2 mに  
 わたって)したが、更に南部は攪乱で不明である。170 m地点の枝管掘削時の観察によれ  
 ば、南北方向の掘削地点から8 m程西に、この溝の西肩がある。前記の九条大路北溝と推  
 定される溝の南部で検出した4条の溝のうち、いずれかが九条大路の南溝になるとされる  
 が、ここでは瓦を出土した溝を南溝と推定しておきたい。これによれば、九条大路の幅

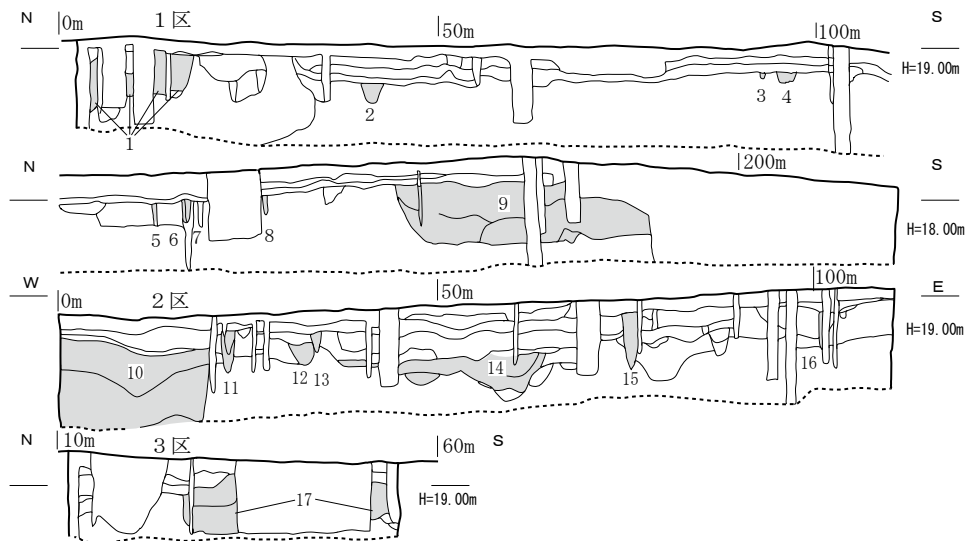


図33 縦・横断面図(縦1:100, 横1:1000)

(溝の心々間で)は、26.6 mになる。⑩古墳時代、流路、2区の0 m～20 mにかけて流路があり、埋土中に古墳時代の須恵器、土師器を含む。流路埋土の遺物包含層は2層あり、上層は褐灰色泥砂層で6世紀の須恵器、土師器を出土した。下層は灰色砂層で古式土師器のみ出土した。⑪溝、2区21.2 m～22.8 mにかけて、幅1.6 mの溝がある。深さは0.6 m、灰褐色泥砂、褐色泥砂が埋土になる。溝内に杭が1本打ち込まれていた。出土遺物はないが近世の溝か。⑫、⑬落込、溝状遺構、西寺西限築地推定地の30 m前後の地点には、31.6 m～34.8 m間に茶灰色泥砂の浅い落込があり、これを切って33.1 m～34.3 mにかけて深さ0.3 mの溝状遺構などがあるが、築地と確定はできなかった。⑭平安時代中期、溝状遺構、37 mからは、遺物包含層、溝状遺構が続く。45 m地点ではGL-0.7 m～0.8 mまでの0.1 mがこの層である。56 m地点では2層に分層され、上層は茶灰色泥砂層、下層は炭混じりの茶灰色泥砂層になる。層の厚さは上下層合わせて0.6 m程である(G L-0.6 m～1.2 m)。この層の東端は63.0 m地点にある。⑮溝状遺構、74.1 m～76 m地点にかけて、溝状遺構を検出した。埋土は2層に分層され、上層は礫を含む灰色泥砂、下層は淡茶灰色泥砂、深さは0.8 mある。⑯柱穴状遺構、100 m地点では柱穴状遺構を検出した。東肩は攪乱され全容は不明だが、深さ0.5 m、幅は0.5 m以上ある。淡茶灰色の埋土で、2 cm～5 cmの礫を含む。西僧坊柱穴の可能性もある。110 m地点では、路面直下が地山の砂礫層となる。⑰溝状遺構、3区の26.4 m～53.4 mにかけて溝状遺構がある。北肩はGL-0.5 mの茶灰色泥砂(床土)の直下から始まり、灰色砂礫層を掘り込んでいる。層は0.4 mの厚さがあり、暗灰色泥砂層の埋土になる。9世紀後半～10世紀初頭の土師器、須恵器が多量に出土した。53.4 mの南にも続くようであるが攪乱されており不明である。

**遺物** 全体で5箱の遺物が出土した。古いものでは古墳時代前期、中期の土師器、須恵器がある。この時代の遺物は2区の西部でしか検出されなかった。平安時代の遺物は、2、3区の各溝状遺構から土師器、須恵器、黒色土器、緑釉・灰釉陶器などが多量に出土した。

**まとめ** 掘削地点の土層から砂礫層とこの上面にある淡茶灰色泥砂層が西寺関連遺構のベースになると考えられる。砂礫層を切って遺構の成立しているのは3区と1区の南部で、他の2区東部、1区北部は淡茶灰色泥砂層を切って遺構がある。この淡茶灰色泥砂層は、所によれば西寺関連遺構の基壇埋土になると考えられるが、今後の検討が必要である。九条大路推定位置では、北溝と南溝かと思われるものを検出できたが、南溝はいずれも規模が小さく出土遺物も瓦だけで、どの溝が南溝にあたるか明確にしがたい。ただ、溝状遺構⑨は、京の南辺部の構造を考える上で重要になろう。(百瀬正恒)

### Ⅲ 京域外の市内遺跡の調査

#### 1 大徳寺境内隣接地

表4-26 図版14-1・2

**経過** 調査地は、古くから遺物散布地として知られた大徳寺境内隣接地にあたる京都市待鳳小学校給食室建設予定地である。給食室建設工事に先立って、埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を実施した。この結果、土壌と遺物包含層が検出された。以下調査の概要を述べる。

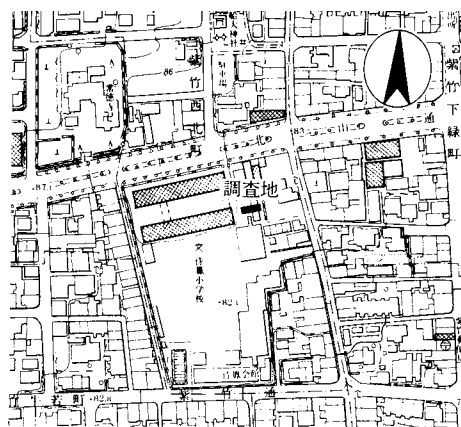


図34 調査位置図 (1:5000)

**遺構** 出土した土壌 (SK1) は東西両端が後世の攪乱を受けていた。規模は南北0.4 mで深さ0.3 mを測る (東西不明)。淡褐色泥砂層を埋土とし、平安時代後期の土師器皿を多量に含む。遺物包含層 (SX2) は淡灰色泥砂層で平安時代前期の遺物を包含する。遺物は極めて小破片で堆積層の厚さは0.2 mを測る。

**遺物** 出土した遺物は土師器皿、甕、須恵器杯、緑釉陶器碗、鉄製釘、その他であった。土壌 (SK1) からは土師器皿及び須恵器甕が出土した。土師器皿は口径が12cm前後 (8~15) と8cm前後のもの (1~4) の2種類が検出された。時期は平安時代後期に属するが、平安京域で出土する同時期の土器に比べ、胎土が粗く器壁がやや厚いなどの差が認められる (図35)。遺物包含層 (SX2) からは土師器杯・皿・甕、緑釉陶器、須恵器杯などが出土した。時期は平安時代前期である。

**まとめ** 今回の調査結果から、平安時代前期~後期に及ぶ遺跡の存在が明らかになったが、なお遺跡全体の性格や規模については推定する資料に欠ける。ただ近辺に多くの古社寺が集中することや、平安時代前期後半頃よりしだいに平安京の東郊や北郊に居住地が広がる (池亭記) ことなどから、調査地付近に貴族の邸宅か別業があった可能性が高い。

(平田 泰)

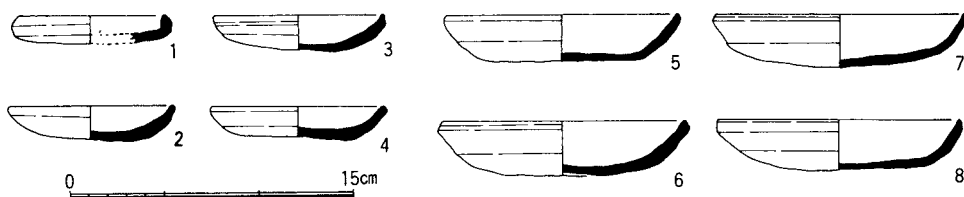


図35 出土遺物実測図 (1:4)

## 2 相国寺境内

表4-19 図版15-1・2

**経過** この調査は、上京区相国寺門前町内での下水管埋設に伴う立会調査として、実施したものである。調査地は、相国寺境内の南北道3条と、東西道2条の約850mの距離で、境内の幹線道路の大部分を占めている。

このことから調査は、相国寺境内の旧地形の復原、相国寺に関連する遺構の有無及び隣接する同志社大学校地内において検出された相国寺造営以前の遺跡範囲などの把握を主な目的とした。調査期間は昭和56年7月9日～9月2日までであった。以下、道路ごとに調査の概要を記す。

**遺構** I区の基本土層は、近・現代の整地層（厚さ0.3m）、近世の遺物包含層（厚さ0.2m～0.3m）、室町時代の遺物包含層（厚さ0.1m～0.2m）でこれより下は茶褐色粘土層の無遺物層となる。調査によって確認できた層のうち、近世の遺物包含層は、北に行くにしたがって薄くなり、法堂付近では、ほとんど確認できなかった。そのため、II区、III区の基本土層は、近・現代の整地層（厚さ0.3m～0.4m）、褐色を呈する砂礫層となる。この砂礫層は、I区では確認しなかった層で、法堂のほぼ北側で初めて確認でき、III区の全域に及

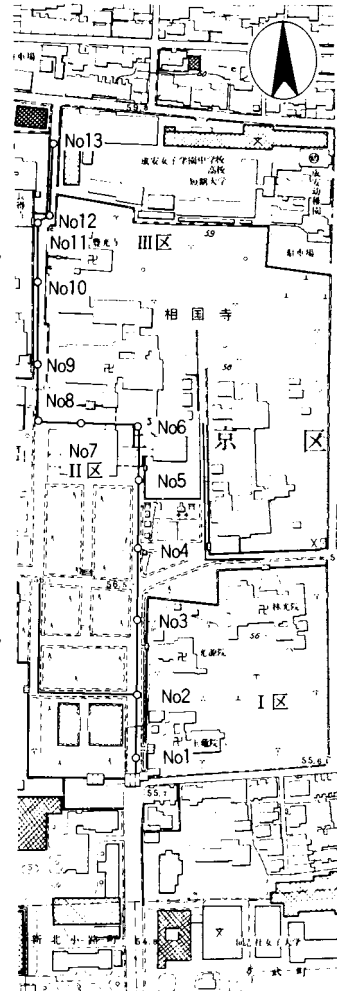


図36 調査位置図(1:5000)

んでいる。また砂礫層は、茶褐色粘土層の上面から認められたために、粘土層よりも時期は新しいと考えられるが、調査区内では、遺物は認められなかった。検出した遺構は、室町時代に相当する遺構が一番多くて鎌倉時代、江戸時代、平安時代、7世紀代の順となる。室町時代の遺構としては、主要伽藍に関連する顕著な遺構はなく、土壙、落込状の遺構群、土器溜が主なものであった。このうちI区玉竜院前で検出した東西石組溝が顕著な遺構としてあげられる。溝幅は内々で約0.6mで、径0.3m前後の河原石を二段に積んでおり、深さは0.5m位で、底は平坦である。底部には、礫を敷き詰めたような痕跡は認められなかった。溝には、褐灰色砂泥層が堆積し、層中から遺物はほとんど出土しなかった。溝上面には、河原石などで覆ったような痕跡が認められなかったため、暗渠であった可能性がある。



なお、このような石組溝をⅢ区长得院東側でも検出したが、時期不明である。鎌倉、平安時代の遺構としては、土壇、柱穴状遺構、井戸状遺構、土器溜などが、主にⅠ区で認められた。柱穴状遺構は、柱並びは不明であったが、確実に建物がこの周辺にあったことを裏付けるものであり、相国寺造営以前の遺跡の存在を物語るものである。7世紀の顕著な遺構としては、Ⅰ区法堂東側で検出した土壇状遺構が挙げられる。規模は、南北1.2m以上、深さ0.4mほどで、南側は鎌倉時代の井戸状遺構に切られている。北肩部はほぼ垂直に立ち上がっており、底部は平坦である。埋土は暗褐色混礫砂泥層で、底付近には炭層がやや厚く帯状に堆積しているのが認められた。この炭層からは土師器、須恵器が出土した。上記のような遺構以外に、時期不明ではあるが、今調査でも最も主要な遺構としてⅠ区光源院前で検出した南北方向の石列遺構が挙げられる。石列は、工事範囲内で南北に14m以上認められ、なおも、北及び南へ延びている。検出した石列は、直径0.4m～0.6m、短径0.3m～0.4mの河原石を使用し、長径を南北に合わせ、石面は西側を向いている。この石列に付属するものは確認できず、かつ出土遺物が

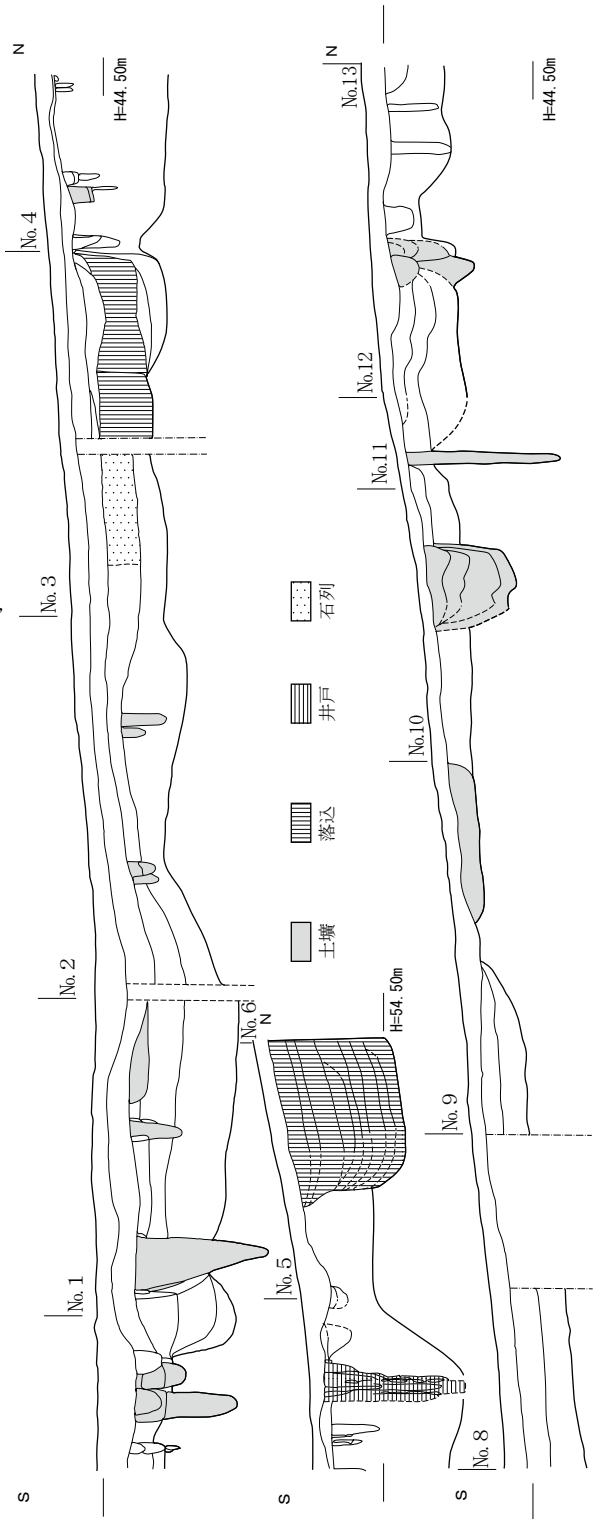


図37 南北縦断面図(縦1:100, 横1:1000)

なく、時期決定はできないが、遺構は地山直上より成立し、また、現相国寺伽藍の方位よりも西にやや振れていること、一方、相国寺古絵図などにも、この遺構に関する記載がないことから、旧相国寺主要伽藍に関連する遺構とは考えられず相国寺造営以前のものと思われる。

**遺物** 出土遺物は、整理箱10箱ほどで、土器、瓦がある。瓦は、室町・江戸時代のもの、そのうちⅢ区普広院前の土壙群から天明8年火災後に投棄されたと考えられる多量の瓦が出土した。土器類は、量的には多くないが、7世紀から室町時代に至る各時期のものが出土し、室町時代のものが多数を占める。このうちⅠ区で検出した土壙からは、完形を含む比較的まとまった土器が出土し、この時期の良好な資料となるであろう。この他、Ⅰ区光源院前で検出した土壙には、須恵器系の甕がほぼすわった状態で検出し、全体の1/3を留める。甕は、埋め甕として用いられたと考えられるが、単独出土であり、この遺構の性格は不明である。

**まとめ** 今回の調査では、相国寺境内の旧状及び造営以前の様子を解明することを主眼として調査を行ったが、調査の結果、室町時代の遺構ばかりでなく、7世紀から鎌倉時代の遺構を検出したことで、当該地周辺の歴史の変遷を知る手がかりを少なからず得ることができた。まず、当該地が相国寺境内において最も中心である地域にもかかわらず、相国寺造営後の土壙・落込などの遺構が検出できたことは注目すべきことである。このような遺構の存在は、相国寺造営以降、度重なる火災を受けながらもどのように存続してきたかを具体的に裏付ける貴重な資料であり、その性格の解明は今後の課題である。次いで、相国寺以前の遺構が検出できたことは、特筆すべき事柄である。従来、同志社校内などでも遺構、遺物は検出されていたが、今回の調査によって確実に7世紀まで遡る遺構が確認できたことは、当該地周辺が確実に7世紀段階に開発が行われ、遺構が存在することが明らかになった。これらの遺構は、神亀3年(726)の計帳にみえる出雲郷との関連が今後問題となろう。また、時期不明ではあるが、真北より西に振れる石列遺構の検出など、当該地が単なる一般集落の性格を有するだけのものではないことがうかがえる。以上、今調査では、工事区に伴う立会調査というごく限定された範囲内で行われたため、検出できた遺構のほとんどは、規模、性格などが不明であり、僅かな手がかりを得たにすぎないが、各時期にわたる遺構は、当該地周辺の歴史の変遷を知る上で貴重な資料となる。

(堀内明博)

### 3 北白川廃寺

表4-16-21 図版16-21

**経過** 調査地は、左京区北白川西瀬ノ内町より東瀬ノ内町の一帯で、2カ所の調査を行った。1カ所は塔跡より30m西に離れ、更に直線で疎水まで延びるものであった。もう1カ所は塔跡より100m北上した地点で、廃寺の北限と考えている所であった。調査期間は昭和56年7月3日～7月23日と、昭和56年7月21日～7月27日であった。調査の内容は次のとおりである。

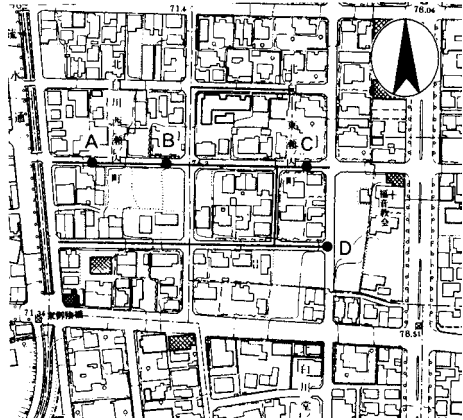


図38 調査位置図(1:5000)

**遺構** 地形は、比叡山より流れ出た白川が西側に扇状地を形成した地区で、基本土層の多くは白川砂によって形成される。この緩斜面に沿って、白鳳時代から平安時代にかけての布目瓦を含む遺物包含層の灰黒色砂層が、西方の疎水付近まで出土量を減じながら分布している。北地区の調査では、1.5m～1.9mの深さにおいて花崗岩の河原石を主体とした石組側溝を検出したが遺存状況は良くない。石材は約0.3m～0.5m大のもので、付近で多くみられる材質である。

**遺物** 出土遺物は飛鳥時代から平安時代にかけての瓦が検出され、その他に平安時代前期の須恵器杯や土師皿も少量検出された。

**まとめ** 北白川廃寺の西方部分は、東方部分より少なくとも3mの落差があり、同一平面上の遺構でなく、西方遺構と称されていた。しかし、塔跡が発見されてから金堂跡と同一遺構群と考えられるようになり、推定寺域が西へ大きく拡大している。寺域の範囲は、東限、南限、西限はほぼ推定できる。このことからあえて寺域を推定すれば、東西に長く南北に短い寺域である可能性も考えられよう。(吉村正親)

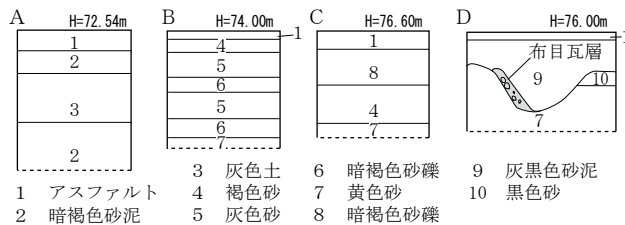


図39 調査区土層断面図(1:100)

#### 4 北野廃寺，北野遺跡

表4-18 図版17-1・2

**経過** 調査区は北区紅梅町，東紅梅町，下紅梅町，大將軍川端町などにまたがり，当該地は平安京右京北辺，北野廃寺及び北野遺跡にあたる。調査は昭和56年6月8日～昭和57年3月18日まで実施した。調査の結果，北野廃寺に関連する多くの遺構が検出され，瓦類だけでも整理箱にして約50箱の出土量があった。遺構の年代は飛鳥時代から平安時代に及ぶ。北野遺跡に関連する遺構としては，堅穴住居跡（古墳後期）をはじめとして古墳時代～中世までの土壇，井戸などを検出することができた。一方，平安京跡に関する遺構としては一条大路北側溝及び路面，正親町小路北側溝がある。今回の調査における遺構総数は130で，古墳時代前期～近世にかけてのものがあり，出土遺物は整理箱にして57箱である。なお，調査方法としては各道路をトレンチ設定し，10mのピッチで各土層の記録を行うことにし，資料とした。

**遺構** 遺構総数130の内訳は，溝状遺構29，土壇状遺構49，柱穴10，井戸18，堅穴住居1，性格不明遺構23である。主な遺構としては古墳前期の溝2条，古墳後期の堅穴住居，飛鳥期の南北溝，当寺院跡の寺域を画する溝と考えられる東限の南北溝及び南限の溝などがある。それらのうち飛鳥期の溝（SD36・54・59）については，北野廃寺第1次<sup>注1</sup>・第6次発掘調査<sup>注2</sup>で明らかにされた南北溝の続きである。また東限と推定される溝（SD56）は，かつて六勝寺研究会が検出した溝<sup>注3</sup>とつながる。この南北溝は幅約3.20m，深さ0.74mの比較的大きな規模を持ち，堆積土の暗褐色泥土層からは多量の瓦類が出土している。南限の溝（SD25）については，南半部が近世の土壇によって切り込まれており全体の規模は不明である。溝内の堆積土は茶灰色泥砂，黄灰色粗砂，黒灰色砂泥層などでSD56の堆積土とは明確な相違を示し，また出土した土器類が平安前期に位置づけられることなどから判断して平安時代の寺域を画する溝と考えられる。一方，一条大路の路面（平安前期～現代まで続く道路跡を確認）下には，泥土と砂礫が互層となった層が約1.2mの厚さで堆積しており，この層（SX19）から古墳前期に属する土器類が多量に出土している。

**遺物** 出土遺物の大半は北野廃寺に関する瓦類が占める。時期は飛鳥から平安に及ぶが，平瓦・丸瓦がほとんどで瓦当は10点程出土しているにすぎない。それらに伴う土器類は平安前期のものが多く，飛鳥，奈良期のものは少量である。土器類には，土師器，須恵器，緑釉陶器，灰釉陶器，二彩陶器などがある。古墳前期の溝跡より出土した土器類には，

甕、壺、鉢、高杯などがある。その他に特異な遺物としては、紙屋川一条西詰の攪乱墳より出土したキリシタン墓碑（板碑型）が2基ある。それぞれ慶長九年（1604）、慶長十二年（1607）の紀年銘がみられる。<sup>注4</sup>

**まとめ** 今回の調査では北野廃寺の寺域を確定することに主眼をおき建物の基壇、溝などの遺構検出に努めた結果、基壇そのものではないがそれと関連すると考えられる石敷遺構を1ヵ所、東限及び南限の溝と推定される遺構を3ヵ所で確認することができた。また当寺院跡に関連する瓦の出土地点を地図上に分布表記してみると、従来推定されていた寺域の範囲よりも北へ60m程広がる形で分布し、出土範囲がほぼ百丈四方（300m）に限定し得ることが判明した。一方、注目すべき遺構の在り方としては、北野廃寺第2次発掘調査地点<sup>注5</sup>（瓦積基壇を検出）より北方約80mの東西道路において、北野廃寺に関連する飛鳥～奈良期の土壌、溝などを11ヵ所検出したことが挙げられる。これより1本北の東西道路においては遺構、遺物包含層の在り方が極めて希薄になり、この付近に当廃寺の北限を考えることができる。なお、北野廃寺周辺には、黒ボク層が広範囲に分布し当寺院跡に関する遺構はすべてこの層の上に成立している。

（家崎孝治）

注1 （財）京都市埋蔵文化財研究所 昭和52年度 第1次発掘調査

注2 梅川光隆『北野廃寺跡（1979年度）文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所

注3 木村捷三郎『高電圧線埋設工事に伴う北野廃寺跡発掘調査並びに立会調査報告書』六勝寺研究会 昭和52年度

注4 「吉利支丹遺物の研究」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第7冊 大正15年によれば、京都市内で8基の切支丹墓碑が発見されていることが報告されている。

注5 （財）京都市埋蔵文化財研究所 昭和52年度 第2次発掘調査

表2 出土遺構一覽表

番号	遺構	検出断面の 規模規格(m) 幅	深	標高(m)	出土遺物	時期	備考
1	SD-8	1.43	0.82	62.5	土師器・須恵器・黒色土器・瓦・灰釉陶器・緑釉陶器	平安中期	東西溝。
2	SD-9	2.50	0.78	63.3	土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦	平安前期	東西溝。
3	SX-10	1.05以上	0.60	62.3	土師器・須恵器・瓦・緑釉陶器	平安前期	墨書土器を含む。
4	SX-19	14.3以上	1.90	57.8	土師器	古墳前期	
5	SD-25	2.75以上	0.52	59.0	土師器・須恵器	平安前期	北野廃寺南限溝。
6	SX-29	3.40以上	1.00	59.5	瓦	平安	
7	SX-30	2.40	1.25	59.5	瓦	平安	
8	SX-31	2.3以上	1.50	59.7	土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦	平安前期	
9	SD-36	1.80以上	1.40	59.1	土師器・須恵器・瓦	飛鳥	南北溝。
10	SD-40	1.24以上	0.46	61.0	土師器・瓦	平安中期	
11	SD-48	2.60以上	0.34	57.4	土師器	平安前期	一条大路北側溝。
12	SD-54	0.20以上	0.74	60.7	土師器	飛鳥	SD-36, SD-59と同一溝。
13	SD-56	3.20	0.74	60.5	土師器・瓦	白鳳	北野廃寺東限溝。
14	SX-57	1.00以上	0.10	59.9	土師器・須恵器	平安中期	石敷遺構。
15	Pit-58	0.58	0.62	59.7	土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦	平安中期	
16	SD-59	3.30	0.94	59.8	土師器・須恵器・瓦	飛鳥	SD-36, SD-54と同一溝。
17	SD-61	2.50	0.64	60.6	瓦	白鳳	
18	SD-64	2.70以上	0.53	61.0	土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦	平安中期	
19	SX-72	1.70以上	0.36	63.6	須恵器・瓦	奈良	
20	SD-75	1.80以上	0.52	63.5	須恵器	奈良	
21	SX-80	3.30以上	0.20	63.2	土師器・須恵器・瓦	飛鳥・白鳳	
22	SK-81	0.80	0.48	63.3	土師器・須恵器・瓦	飛鳥・白鳳	
23	SK-83	0.90	0.45	63.3	土師器・須恵器・瓦	飛鳥・白鳳	
24	SD-84	2.30	0.46	63.4	土師器・須恵器・瓦・緑釉陶器	奈良中期	
25	SK-85	1.26	0.38	63.4	土師器・須恵器・瓦	飛鳥・白鳳	
26	SX-89	1.90以上	0.12	63.3	土師器・瓦	飛鳥・白鳳	
27	SX-130	22.30以上	1.10	58.0	土師器・灰釉陶器	平安中期	

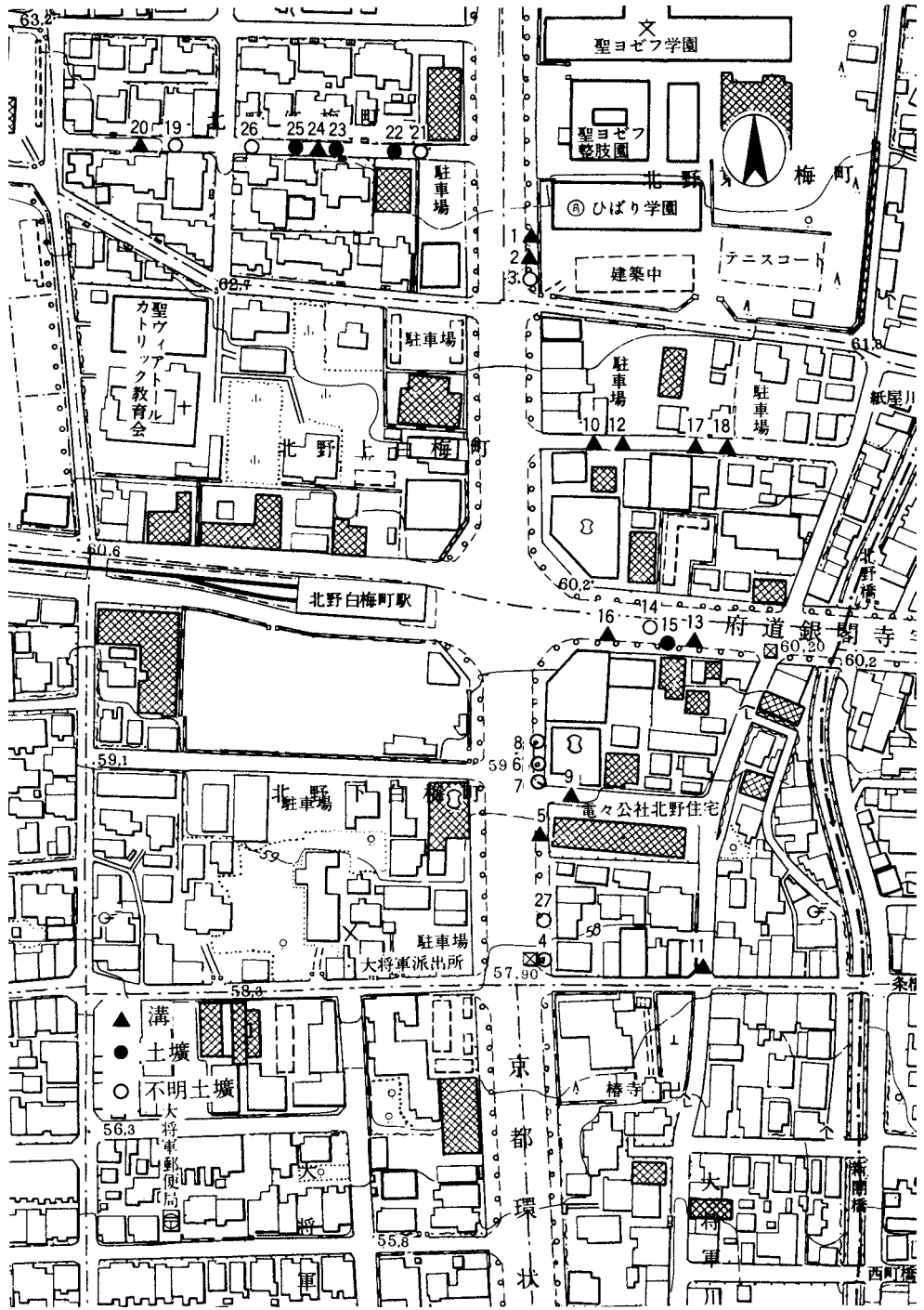


図 40 出土遺構分布図 (1:2500)

## 5 中久世遺跡

表4-17 図版18-1・2

**経過** 本調査は、桂川右岸流域関連中久世処理分区中久世（その1）公共下水道工事に伴う立会調査である。調査地は、京都市南区久世中久世三丁目・四丁目・五丁目、久世殿城町にわたっており、中久世遺跡に該当する。当遺跡では、過去に発掘調査が数例行われているが、遺跡の全体像を捉えるまでには至っていない。本調査においては遺跡の範囲を推定することを主眼として、遺構・遺物の分布状況、性格、立地条件などを把握するように努めた。調査期間は昭和56年2月2日～昭和57年2月18日であった。

**遺構** 遺構の分布は、調査地の南西三分の一を除いた地域に普遍的に存在することが確認された。遺構の種類は、流路（溝）、土壇、竪穴住居、方形周溝墓<sup>註</sup>であり、時期は弥生時代中期から室町時代にかけてのものである。このうち主な遺構を挙げてみる。

自然流路（SD1・4・6） いずれも弥生時代中期から中世までの遺物を包含しており、推定の幅は約20～30cm、深さは約1.5mである。流れの方向は北西から南東にかけてであり、蛇行しながら現在の桂川に到達するものと思われる。流路内堆積土は、遺構検出地点で各々異なっているが、基本的には上層から褐色砂泥、暗灰色砂泥、腐植土、砂層となっている。

住居(23) 住居内からは弥生時代後期の土器を少量採取した。埋土は暗褐色砂泥であり、床面直上では炭を多量に含む。北端部では焼土塊を確認した。南半部は中世の土壇に切られている。

土壇 各時期にわたって存在している。弥生時代及び古墳時代前期頃までにかけては、河川に大きく規制を受けたようである。中世に至ると全域に分布している。

**遺物** 遺物の大半は土器でありそれらはSD1・4・6の流路跡から出土した。出土量

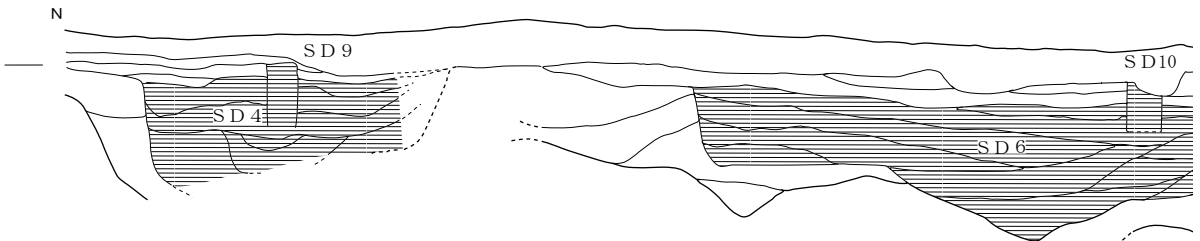


図41 南北縦断面図(縦1:100, 横1:1000)



が最も多いのは4からであった。しかし掘削工事に伴う調査であり、層的に土器を採取することは不可能に近い。層位ごとに土器の時期確認をするのは発掘調査によるしかない。これらの遺構からは、木器（建築部材、曲物他）、石器（石包丁、石斧、石剣）、石製模造品（有孔円板）も出土している。推定集落跡内の土壙、溝からも良好な状態で遺物の出土（甕、壺、高杯）がみられる。特にSD 13（弥生時代）からは石匙が出土している。

**まとめ** 今年度の調査で得られた問題点及び成果を以下に述べる。

①大規模な流路を3条確認した。ベースとなる土質を対比させてみると、SD 1～4の間は弥生時代以前においては一つの大きな谷状の落込を想定することが可能である。

②SD 1と6にはさまれた地域は弥生時代中期の遺構が多く集中する。SD 6以西は弥生時代後期以降の遺構が存在する。

③SD 4の西肩部、SD 6の東肩部で有孔円板が発見されたことは、これらの流路に狭まれた地域で古墳時代前期～中期において祭祀が行われていたことを示唆する。

④SD 6の南部で竪穴住居が検出された。土層復元を行ってみると、微高地状を呈しており、また、土地条件図などを参照してみると自然堤防がAの範囲（東西約150m、南北200m）と一致しており、集落跡として想定することが可能である。またAの地域は弥生時代中期から後期の遺構が存在する。この地域から北西方向では、以前の調査で方形周溝墓が確認されていることから、Bの墓域を想定してみたが、この範囲は未確認である。

⑤SD 9～12は、ほぼ真南北、真東西に直行する溝である。溝の肩口間の間隔は約109mである。時期は鎌倉時代以降である。これらは条里に伴う遺構であり、中世荘園と関連する遺構であると考えられる。

（久世康博）

注 1980年、当研究所の発掘調査結果による。（未報告）

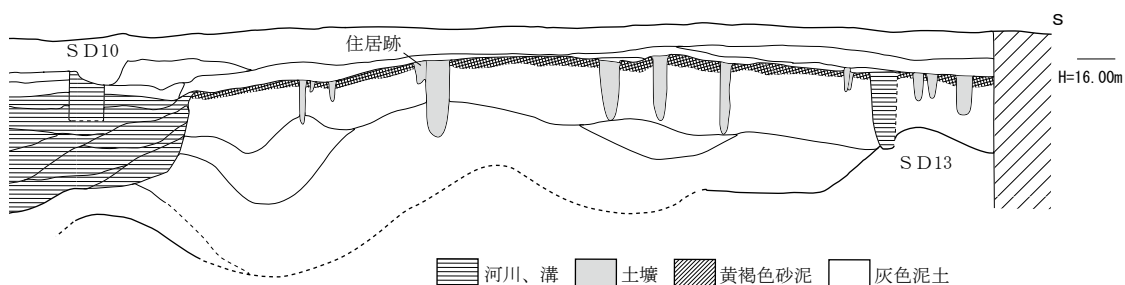


表3 出土遺構一覧表

番号	遺構	検出断面の規模 (m)		標高 (m)	出土遺物	時期	備考
		幅	深				
1	SD-1	30	1.4	15.8 ~ 15.7	弥生土器・須恵器・土師器	弥生中期 ~ 中世	南方部は発掘調査実施。
2	SD-2	5.2	0.5	15.7 ~ 15.6	弥生土器	弥生中期	焼米あり、豆粒あり。
3	SD-3	1.5	0.45	16.0 ~ 15.5	弥生土器片	弥生	
4	SD-4	30	1.9	16.2 ~ 15.4	弥生土器・土師器・須恵器・木製品・緑釉陶器・灰釉陶器・石器	弥生中期 ~ 中世	北方部は発掘調査実施。
5	SD-5	5.5	0.9	16.2 ~ 15.9	土師器・須恵器・瓦・曲物・黒色土器	平安後期	
6	SD-6	14 ~ 20	1.2	16.3 ~ 15.3	弥生土器・土師器・須恵器・木製品・石器	弥生中期 ~ 平安	焼米あり。
7	SD-7	21	0.6	16.1	弥生土器 (壺)	弥生後期	試掘調査により確認。
8	SD-8	10	1.7	16.5 ~ 16.2	弥生土器・土師器・須恵器・木製品	弥生中期 ~ 中世	SD-6の支流か。
9	SD-9	5	1.0	16.0	土師器	不明	条里溝。 (大部分は現代に踏襲)
10	SD-10	4.2	0.6	15.8	土師器・須恵器・弥生土器・瓦器	鎌倉	条里溝。
11	SD-11	3.5 ~ 5.5	0.7	16.1 ~	瓦器・土師器	鎌倉	条里溝。 (一部分は現代に踏襲)
12	SD-12	0.5	0.5	16.2	土師器・須恵器・軒平瓦	鎌倉	条里溝。 (一部分は現代に踏襲)
13	SK-1	1.6	0.8	16.6	弥生土器 (壺・甕)	弥生中期	
14	SK-2	0.7	0.41	15.9	弥生土器	弥生後期	焼米あり。
15	SK-3	1.25	0.33	16.2	弥生土器 (壺・甕) 石庖丁	弥生中期	
16	SK-4	2.3	0.28	16.6	土師器・製塩土器・須恵器 (皿・蓋・杯・平瓶)	奈良末期	墨書土器あり。
17	SK-5	0.4	0.45	15.9	弥生土器 (壺)	弥生後期	
18	SK-6	1.2	0.35	15.4	弥生土器	弥生後期	
19	SK-7	0.5	0.35	15.7	弥生土器	弥生中期	焼米あり。
20	SK-8	0.35	0.4	16.5	土師器・須恵器 (壺・高杯・皿)	奈良末期 ~ 平安初期	
21	SK-9	0.9	0.7	16.7	弥生土器 (甕)	弥生後期	
22	SK-10	0.5	0.62	15.7	黒色土器・須恵器・瓦	平安後期	
23	1号住居	7.4	0.32	16.0	弥生土器片	弥生後期	焼土あり。
24	SD-13	2.4	1.0	15.9	弥生土器片・石匙	弥生後期	
25	SK-11	1.2	0.6	15.8	弥生土器 (高杯・甕・壺)	弥生後期	完形品5点
26	SK-12	2.1	0.29	15.7	弥生土器 (壺)	弥生後期	住居跡か。
A	推定集落域						
B	推定墓域						発掘調査により方形周溝墓2基検出。

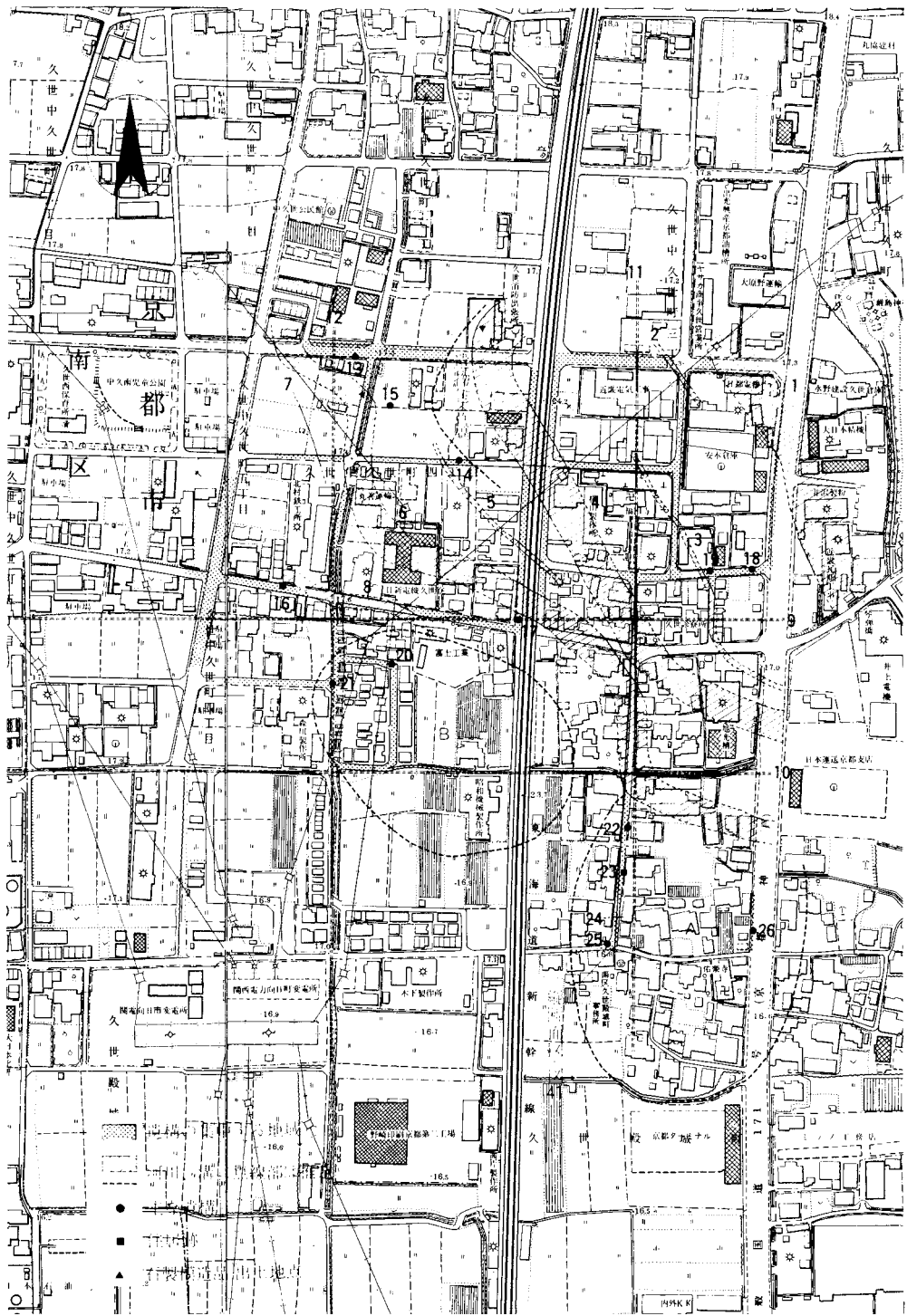


図 42 出土遺構分布図 (1:5000)

## 6 国立京都病院構内遺跡

表 4-30

**経過** 調査地は伏見区深草向畑町1-1の国立京都病院外来棟前の緑地帯で、平安時代中期の遺物散布地である国立京都病院構内遺跡にあたっている。すぐ北には山科、勧修寺に抜ける大岩街道とそれに平行して七瀬川が流れる。また附近にはおうせんでう廃寺、がんせんでう廃寺、深草廃寺などの寺院跡、集

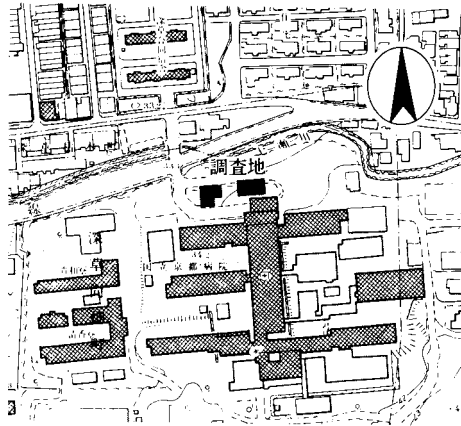


図 43 調査位置図 (1:5000)

落跡である西飯食町遺跡などのほぼ同時代の遺跡が分布している。調査地点では東から西へかなりの高低差を持った傾斜地で、そのほとんどが盛土で厚さ2m~3mにも及んでいる。当初、東西に長いL字形に調査区を設定する予定であったが、使用中のガス管の所在が不明のため途中約8mは未発掘となった。そのため調査区を2カ所に分け西半のものを第1グリッド、東半を第2グリッドとした。調査は昭和56年5月6日~5月20日まで実施し、最終調査面積は約80㎡であった。

**遺構** 基本土層は地表下約2.5m~3mまでが昭和31年に国立京都病院が造成されたときの盛土で、その下に厚さ数cmのアスファルト面と0.4m~0.6mの盛土があり、その下が遺構面(黄灰色砂泥層)となる。ただし、第1グリッドでは厚さ0.2mの茶灰色泥砂層が遺構面直上に堆積している。なお、アスファルト面の海拔高は33.6mである。

第1グリッドで検出された遺構は、ほぼ中央部の現代の落込と西壁沿いに南北の方向に流れを有する流路である。流路は東肩のみの検出で規模は不明であるが、検出幅1.3mと

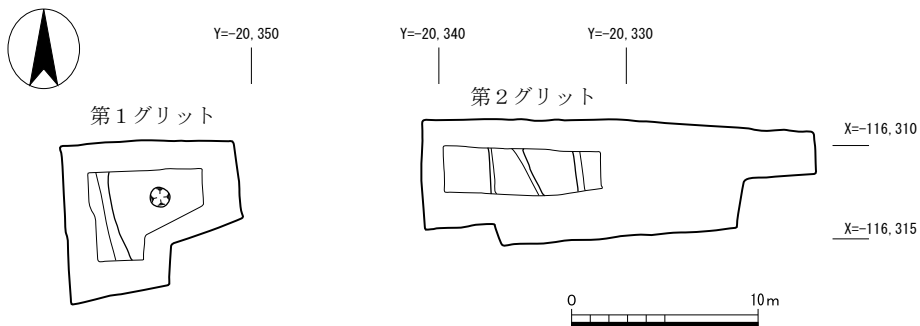


図 44 遺構平面図 (1:400)

深さ 0.9 m を測る。出土遺物は近世、近代のものがほとんどで、中世のものも含まれる。

第2グリッドでは2本の流路が検出されている。西側の流路はほぼ南北に流れの方向を持つもので幅 1.8 m ～ 2.8 m、深さは約 0.5 m を測る。埋土は砂礫層で、その間層として、細砂と泥土が堆積している。東側の流路も南北に流れの方向を持つ。しかし、西肩は検出したが、東肩は降雨により壁が崩壊したために検出できず、幅は不明である。埋土は上から黄灰色泥土層、黒灰色泥砂層、灰色粗砂層が堆積しており、深さは 0.7 m である。土師器、瓦器を含み、鎌倉時代の流路と思われる。

**遺物** 出土した遺物は古墳時代の須恵器の杯身、平安時代の平瓦、須恵器、鎌倉時代の土師器皿、瓦器椀・羽釜・盤、須恵器系播鉢などである。すべて流路内から出土しており、大半が鎌倉時代の土師器皿である。古墳、平安時代の遺物は摩滅が著しく上流から流されてきたものと思われる。

**まとめ** 検出した流路のうち第2グリッドで検出したものは七瀬川の旧流路と思われ、それらは鎌倉～室町時代にかけてのものだった。その下に更に古い流路があると思われたが、湧水が激しく調査区の四壁が崩壊する恐れがあったため、それ以上掘り下げることができず、時期、規模などについては確認することはできなかった。 (木下保明)



図 45 遺 構 全 景

## IV ま と め

今年度実施した平安宮・京跡を対象とした試掘・立会調査は試掘調査2件、立会調査15件であった。立会調査は下水道、上水道、ガス、電気などの道路部での工事を対象としていることから、調査においては安全確保に留意し、工事進行に合わせて行うといった困難な状況の下での調査である。平安宮・京跡における立会調査は、平安京が現市街地と全く重複した条件下にあり、推定される大路、小路が現道路部に重複して来ることから、条坊遺構の検出と確認を主要な目的として行った。その結果、各所で大路、小路の側溝を数多く検出し得た。以下、左、右京に分けて調査成果を挙げてみる。

左京では、二条三・四坊の調査<sup>本文P 2</sup>において、東京極大路東西両側溝、万里小路東西両側溝、富小路西側溝、東洞院大路東側溝、春日小路南側溝を確認した。また三条一坊の調査<sup>本文P 6</sup>では、二条大路路面及び築地跡の検出を行っている。

右京では北辺二・三・四坊、一条二・三・四坊と北野廃寺、北野遺跡の調査<sup>本文P 10</sup>で一条大路北側溝を3カ所で、馬代小路東側溝を3カ所で、西側溝を2カ所で、三条一坊の調査<sup>本文P 14</sup>では、二条大路北側溝、三条大路北側溝、三条坊門小路南側溝をそれぞれ確認している。五条二坊、六条二坊の調査<sup>本文P 19</sup>では西堀川小路東側溝、西靱負小路西側溝の検出と、西堀川の東西両肩を検出し、川幅などを確認している。また西堀川川跡の確認は四条二坊<sup>本文P 16</sup>の調査でも行っている。西寺跡の調査<sup>本文P 31</sup>では、九条大路南北側溝の検出と、更に南で大規模な溝を検出し、平安京南辺部を考える上での一資料を得ている。以上のように、平安京左・右京の立会調査では、大路小路の側溝を20以上検出し得た。

条坊遺構などの検出とは別に平安京造営以前の遺構、遺物の検出も行っている。北辺二・三・四坊、一条二・三・四坊と北野廃寺、北野遺跡の調査<sup>本文P 10</sup>では、右京区大將軍一条町の北野遺跡内で、弥生時代～古墳時代前期の土壌と溝状遺構を検出している。右京五条二坊・六条二坊の調査<sup>本文P 19</sup>では、西堀川に重複して下層に同様の流れを有する流路を確認し、右京九条二坊の調査<sup>本文P 28</sup>では、西寺下層遺構に関連する古墳時代の流路を、更に西寺跡の調査でも同様の流路を確認している。包含層の確認も流路と同様、数カ所で検出しているが、その中でも、右京八条二・三坊の調査<sup>本文P 25</sup>で調査区内の衣田町遺跡（弥生時代～古墳時代）の南において古墳時代前期の包含層を検出したことにより、当遺跡の範囲が更に南へ広がることを確認した。

京域外の市内遺跡を対象とした調査は14件で、その内容は試掘調査8件、立会調査6件

であった。今年度実施した京域外の調査は遺跡の種類別にみると、寺院跡、城郭跡、集落跡、その他の遺跡の4つに大別することができる。

寺院跡の調査は、北野廃寺、相国寺境内、北白川廃寺、大徳寺境内隣接地などが主なもので、大徳寺境内隣接地を除けばすべて立会調査であった。

北野廃寺の調査<sup>本文P 38</sup>では、北野廃寺の東限と南限を示し得る両側溝、基壇と考えられる石敷遺構の検出を行い、寺域を確定する資料を得た。相国寺境内の調査<sup>本文P 34</sup>においては、相国寺旧境内に関連する土壌、溝、井戸などの遺構を検出した。京都市北部に位置する北白川廃寺の調査<sup>本文P 37</sup>においては、廃寺の北部で花崗岩河原石の石組み遺構を確認している。試掘調査<sup>本文P 33</sup>を行った大徳寺境内隣接地では、平安時代前期の遺物包含層と、平安時代後期の土壌を検出した。

城郭跡の調査は伏見城跡の試掘調査2件<sup>表4-23, 24</sup>と立会調査1件<sup>表4-22</sup>で、明確な遺構の検出はでき得なかった。

集落跡の調査は、中臣遺跡、中久世遺跡の2件あった。中臣遺跡の調査<sup>表4-29</sup>においては、後世の攪乱が著しく、明確な遺構は検出し得なかった。中久世遺跡は広域にわたる下水道の立会調査<sup>本文P 42</sup>を行い、調査の結果、弥生時代～室町時代にわたる大規模な流路を3条確認し、流路より多量の弥生土器、石器、木器類などを検出した。

その他の遺跡の調査では、国立京都病院構内遺跡を対象とした試掘調査<sup>本文P 46</sup>で、旧七瀬川の流路を確認し、流路内より古墳時代～鎌倉時代の遺物を検出した。

以上が昭和56年度の試掘・立会調査の調査成果のまとめである。今年度実施した試掘・立会調査は、平安京跡をはじめとして、現在の市街地と重複しており、立会調査においては、調査地が道路部であるため限定された条件下の調査であった。それにもかかわらず平安京大路、小路の側溝、あるいは路面を数多く確認し、更に京域外においては対象遺跡に関連する遺構、遺物の検出を行い得たことは、試掘・立会調査が現状で抱える問題が多々あるにせよ、市街地での有効な調査方法として明確化されたとと言えるだろう。

(加納敬二)

表4 試掘・立会調査一覧表

1. 平安宮・京跡

番号	遺跡推定地	年代	現 地 名	期間	規模 (m)	遺跡番号	試・立	工事種別	担当者	備 考	本文
1	平安宮跡	平安	中・聚楽廻松下町～上・七本松通下立売下ル西東町	56・5・13 ～5・26	96	平安京	立	ガス	百瀬	近代の溝1。	
2	平安宮跡	平安	上・丸太町通千本東入ル～大宮東入ル	56・7・25 ～10・5	120	平安京	立	電気	平田	土屋町西の地点で平安の土壌1、土壌からは瓦を大量に採集。	
3	朱雀大路	平安	中・国鉄二条駅構内	56・5・29 ～6・2	64㎡	平安京	試	新築 工事	磯部	検出なし。	
4	左京二条二・三坊	平安	中・丸太町通堀川東入ル～新町	56・8・29 ～10・14	350	平安京	立	電気	平田	釜座通～西洞院間で平安～室町、油小路～堀川間で平安の包含層検出。	
5	左京二条三・四坊	平安	中・大炊町～春日町地内	56・4・28 ～6・25	63	平安京	立	電話	平田	両替町～室町丸太町交叉点で江戸の流れ堆積。	
6	平安京左京二条三・四坊白河北殿	平安	上・京都御苑～中・下御堂町地内～左・東丸太町地内	56・4・4 ～10・3	287	平安京 537-8	立	電話	平田	川端通～熊野神社間で平安後期～鎌倉、堺町～間町で平安後期～室町の包含層。	
7	左京二条三・四坊	平安	中・丸太町丸九東入ル～河原町西入ル	56・9・17 ～57・3・19	800	平安京	立	電気	堀内	古墳～江戸の遺構140。	2頁
8	左京三条四坊	平安	中・尾張町～上白山町地内	56・9・10 ～10・5	294	平安京	立	上水	堀内	江戸～室町の包含層。最終遺物は整理箱に一箱。	
9	左京五条一坊	平安	下・四条大宮町他	56・5・25 ～6・8	424	平安京	立	上水	吉村	五条坊門小路路面。	
10	左京五条二坊	平安	下・四条通～仏光寺通大宮通～堀川通	56・4・28 ～5・24	814	平安京	立	上水	吉村	平安末期の土壌1、土壌からは大量の土師器と灰釉製の風字硯を採集。	8
11	左京五条四坊	平安	下・御幸町通～麩屋町通四条高辻仏光寺通～柳馬場地内	56・10・12 ～11・6	440	平安京	立	上水	平田	江戸後期の焼土層、室町の包含層。	
12	左京八条一坊	平安	下・和気町・花畑町地内	56・5・15 ～6・9	250	平安京	立	上水	平田	鎌倉の包含層。	
13	右京一条三坊	平安	中・西ノ京伯楽町14～南大炊御前町27	56・4・15 ～6・15	140	平安京	立	ガス	百瀬	中世の流路1。平安の土壌1。	
14	右京北辺二・三・四坊一条二・三・四坊と北野庵寺と北野遺跡	平安	右京区・北区一円	56・10・10 ～57・8・20	11545	平安京 118 119	立	下水	家崎 加納	弥生後期～中世の遺構28。	10
15	右京三条一坊	平安	中・西ノ京永本町～西月光町地内	56・4・21 ～7・30	800	平安京	立	ガス	百瀬	二条大路北側溝。	14
16	平安宮跡	平安	市内一円	56・5・8～ 57・5・10	16620	平安京	立	ガス	百瀬 吉村	25ヶ所の調査、16-1～25(京域外も含む)	
16-1	平安宮跡	平安	上・智恵光院通御屋町下ル橋町～中立売通上ル多門町445番地先	56・9・30 ～11・12	325	平安京	立	ガス	吉村	検出なし。	
-2	平安宮跡	平安	上・御前通仁和寺下ル下堅町182番～下立売通下ノ森東入ル西東町304番地先	56・7・1 ～9・12	440	平安京	立	ガス	吉村	表土下0.6mで平安時代の包含層検出。	
-3	左京三条一坊	平安	中・西ノ京北聖町～式部町地先	56・5・8～ 6・23	395	平安京	立	ガス	百瀬	二条大路路面検出。	6
-4	左京三条一坊	平安	中・西ノ京北聖町～御池通神泉苑通西入神泉苑町地内	56・9・5～ 57・2・27	1570	平安京	立	ガス	吉村	鎌倉期の土壌1	
-5	右京三条二坊	平安	中・西ノ京西月光町～銅駝町地先	56・6・25 ～9・19	425	平安京	立	ガス	吉村	検出なし。	
-6	右京三条二坊・三坊	平安	中・西ノ京桑原町1番地～三条三坊町地先	56・11・16 ～11・28	220	平安京	立	ガス	百瀬	検出なし。	
-7	右京四条一坊	平安	中・壬生中川町～壬生森町地先	56・7・23 ～8・29	302	平安京	立	ガス	百瀬	近世の南北方向の大規模な流路検出。	
-8	右京四条二坊	平安	中・壬生上大竹町～壬生東大竹町地内	56・10・26 ～57・1・16	457	平安京	立	ガス	百瀬	平安中期の包含層検出。	
-9	右京四条二坊	平安	右・西院上今田町18番～中・壬生瀧田町地先	56・12・17 ～3・31	1285	平安京	立	ガス	百瀬	西堀川の流路と東西方向の流路検出。	16
-10	右京六条一坊	平安	下・中堂寺庄ノ内町28一20番～中堂寺庄ノ内町4番地先	56・6・17 ～11・30	1885	平安京	立	ガス	吉村	鎌倉期の井戸1。時期不明の南北溝1。	18
-11	右京五条二坊六条二坊	平安	右・西院高山町～中・壬生東高田町地先	56・6・18 ～57・3・31	3050	平安京	立	ガス	百瀬	西堀川小路、西堀川、西載負小路の検出。平安前期の包含層、古墳時代の流路検出。	19
-12	右京七条一坊	平安	下・中堂寺南町8一3番～西七条北東野町32番地先	57・3・23 ～57・5・10	802	平安京	立	ガス	吉村	七条中学校北辺より流れ状の堆積を検出。	22

(遺跡の年代は京都市遺跡地図による)



番号	遺跡推定地	年代	現地名	期間	規模(m)	遺跡番号	試・立	工事種別	担当者	備考	本文
16-13	右京七条二坊(1)	平安	下・西七条西石ヶ坪町～八反田町78番地内	56・11・21 ～57.2.10	645	平安京	立	ガス	百瀬	平安中期の井戸1、土壌1、流路1。	23頁
-14	右京七条二・三坊	平安	右・西京極大門町～下・西七条南農田町60番地先	56・12・14 ～57・3・3	1212	平安京	立	ガス	百瀬	検出なし。	
-15	右京七条二坊(2)	平安	下・西七条掛越町60番～北東野町8番地先	57・1・19 ～3・31	722	平安京	立	ガス	吉村	平安前期の井戸1、西大宮大路西側溝検出。	24
-16	右京八条二・三坊	平安	下・七条御所ノ内西町2番～西七条石井町地内	56・9・18 ～10・28	527	平安京	立	ガス	百瀬	平安前期の溝1、平安中期・後期の井戸各1古墳時代の包含層検出。	25
-17	右京九条二坊	平安	南・唐橋門脇町25番地～唐橋川久保町地内	56・8・19 ～10・24	522	平安京	立	ガス	百瀬	平安中期の井戸2、古墳時代の流路を検出。	28
-18	左京九条二坊	平安	南区東寺東門前町～東門前町12番地先	56・11・5 ～27	520	平安京	立	ガス	吉村	地表下0.7mで鎌倉期の包含層検出。	
-19	左京九条三坊	平安	南区東九条中殿田町～烏丸町18番地先	56・12・1 ～57・2・10	625	平安京	立	ガス	吉村	13～14	9
-20	西寺跡	平安	南区唐橋堂ノ前町26番～西寺町26番地先	56・7・23 ～8・29	277	平安京238	立	ガス	百瀬	西僧坊西部で平安中期の溝1。西僧坊柱穴九条大路南北両側溝、古墳時代の流路検出。	30

## 2. 京域外の市内遺跡

番号	遺跡推定地	年代	現地名	期間	規模(m)	遺跡番号	試・立	工事種別	担当者	備考	本文
16-21	北白川廃寺	奈良前期～鎌倉	左・北白川西瀬ノ内町59番～東瀬ノ内町地先 左・北白川西瀬ノ内町28-4番～東瀬ノ内町地先	56・7・3-7・23 56・7・21～7・27	670	528	立	ガス	吉村	時期不明の石組側溝1。	37頁
-22	貞観寺跡	奈良	伏・深草僧坊町～瓦町地内	56・8・5 ～8・14	190	819	立	ガス	吉村	検出なし。	
-23	法性寺跡	平安中期～鎌倉	伏・深草正覚町8番地～願成町8番地先	56・6・5 ～6・20	455	620	立	ガス	吉村	時期不明の溝1。	
-24	伏見城跡	桃山	伏・京町2丁目地内～道阿弥生地内	56・8・26 ～9・14	230	846	立	ガス	吉村	江戸末期から近代の土壌1。	
-25	中久世遺跡	弥生中期～中世	南・久世中久世5丁目39番～殿城町50番地先	56・6・24 ～7・31	355	244	立	ガス	百瀬	中世の柱穴群、包含層。奈良から長岡期の包含層。弥生から古墳時代にかけての流路検出。	
17	中久世遺跡	弥生中期～中世	南・久世中久世町(3-5丁目)殿城町、大蔵町	56・2・2 ～57・2・18	6150	244 245	立	下水	久世	弥生～平安の流路、土壌、住居跡。	42
18	北野廃寺北野遺跡	弥生後期飛鳥～中世	北区一円	56・6・8 ～57・3・18	7381	118 119	立	下水	家崎	弥生末～中、近世の遺構130。	38
19	相国寺境内	鎌倉～室町	上・相国寺門前町	56・7・9 ～9・2	850	204	立	下水	堀内	飛鳥～近世の遺構50。	34
20	法界寺境内	平安後期～室町	伏・日野不動橋町他	56・6・18 ～10・15	1282	864	立	下水	菅田	検出なし。	
21	長岡京跡羽束師遺跡	弥生～中世	伏・羽束師菱川町、古川町、志水町	57・3・19 ～9・30	2051	長岡京859	立	下水	久世	弥生の溝1。	
22	嘉祥寺跡伏見城跡	平安桃山	伏・大亀谷万船敷町、深草瓦町、深草坊町、深草真宗院山町	56・4・3 ～5・5	3000	820 846	立	下水	梅川	時期不明の包含層。	
23	伏見城跡	桃山	伏・上油掛町40番2 塩屋町216番2、3、247番3	56・7・15 ～7・21	76㎡	846	試	新築工事	平田	検出なし。	
24	伏見城跡板橋廃寺	桃山奈良前期	伏・下板橋町610 伏見板橋小学校	56・10・7 ～10・14	25㎡	846 855	試	新築工事	上村	検出なし。	
25	御土居隣接地	桃山	北・紫竹下園生町26 紫竹小学校	56・9・17 ～9・18	30㎡	194	試	新築工事	辻純	地表下0.35mにて古墳の包含層。	
26	大徳寺境内隣接地	平安後期	北・紫竹西北町13 待鳳小学校	56・8・24 ～8・29	45㎡	195	試	新築工事	平田	平安後期の土壌1、平安前期の包含層。	33
27	田中遺跡隣接地	室町	左・久保町24 養徳小学校	56・9・24 ～9・27	100㎡	545	試	新築工事	辻純	古墳の包含層。	
28	檜原廃寺隣接地	奈良前期平安前期	西・檜原三宅町24番地 檜原小学校	56・10・5 ～10・12	40㎡	430	試	新築工事	前田	時期不明の溝1、土壌1。	
29	中臣遺跡	弥生～中世	山・勤修寺栗野町42 京都市立勤修小学校	56・10・19 ～11・4	133㎡	721	試	新築工事	菅田	検出なし。	
30	国立京都病院構内遺跡	平安中期	伏・深草向畑町1-1 国立京都病院	56・5・6 ～5・20	80㎡	830	試	新築工事	木下	鎌倉～室町の流路3。	46

(遺跡の年代は京都市遺跡地図による)